

多賀城市文化財調査報告書第42集

高崎遺跡

—第13～16次調査報告書—

平成8年3月

多賀城市教育委員会

高崎遺跡

—第13～16次調査報告書—

平成8年3月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市教育委員会が高崎遺跡の調査を開始したのは昭和55年のことであります。以来継続的に調査を重ね、本年度で18回を数えるまでに至りました。調査成果も着実に蓄積され、遺跡の解明が進んでいるように思われます。

さて、本書は平成6年に実施した第13～15次調査と翌7年に行なった第16次調査の成果を収録したものです。いずれも遺構・遺物が少なく、従って簡単な内容となっております。しかし、今後隣接地を調査する際には貴重な資料となることは疑いなく、ひいては高崎遺跡の解明につながると考えられます。埋蔵文化財調査センターでは、年間の事業概要をまとめた「年報」を毎年刊行しており、その中に発掘調査の略報を収録しておりますが、別個の事業として実施した発掘調査の成果を1冊にまとめて刊行するのはこれが初めての試みです。成果の大小にかかわらず、このような形で速やかに調査結果をまとめ、公にすることは私達に課せられた義務と心得、今後一層努力する所存です。

最後になりましたが、本書の作成にあたり、ご指導・ご協力を頂いた宮城県多賀城跡調査研究所および国立歴史民俗博物館の諸先生方に対し、衷心より御礼申し上げます。

平成8年3月

多賀城市教育委員会

教育長 櫻井茂男

例 言

1. 本書は平成6・7年度に実施した高崎遺跡第13~16次調査の成果をまとめたものである。
2. 遺構番号は第1次調査からの一連番号である。
3. 本書中で使用した遺構の分類記号は右のとおりである。
4. 調査区の実測基準線は「平面直角座標系X」を使用して設定している。
5. 掃図中の高さは標高値を示している。
6. 土色は『新版標準土色帖』(小山・竹原:1973)を参照した。
7. 本書の作成に際し、瓦については進藤秋輝氏(宮城県多賀城跡調査研究所長)、土器については丹羽茂氏(宮城県多賀城跡調査研究所研究第一科長)から御教示を賜った。また、第16次調査で出土した土器の付着物については永嶋正春氏(国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授)に分析を依頼し、その結果は「V、第16次調査」に収録した。
8. 本書の執筆は、I・III・Vが千葉孝弥、IIが石川俊英、IVが武田健市であり、図集は千葉が行った。
9. 調査に関する諸記録および出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している

S	■	建 物	SA	柱 列	S I	壁穴住居
SD	溝	SK	土 壤	S X	その他	

目 次

I.	遺跡の位置とこれまでの調査成果 1	IV.	第15次調査 7
II.	第13次調査 2	V.	第16次調査 12
III.	第14次調査 4			

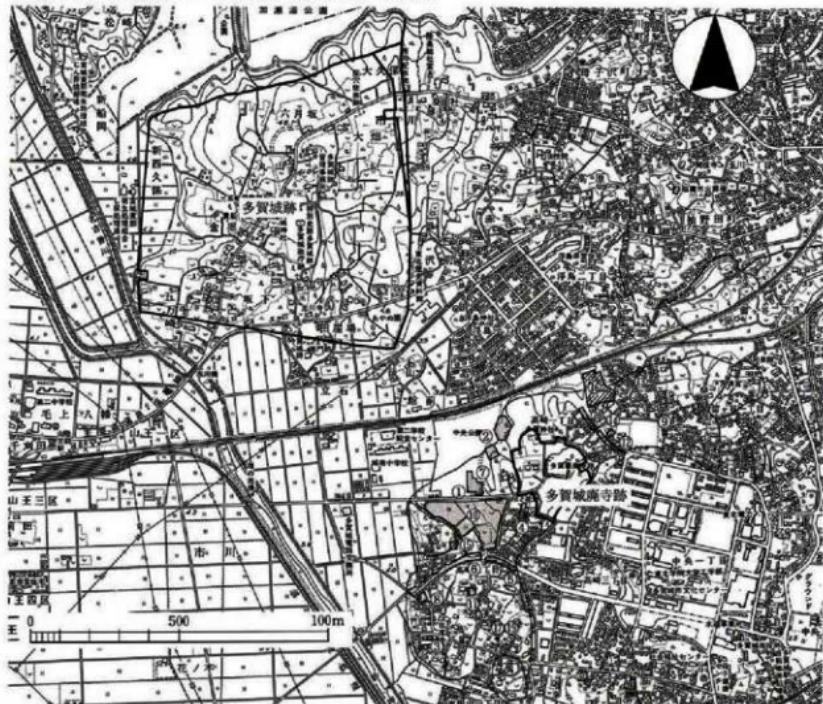
調 査 要 項

1. 遺跡名 高崎遺跡(宮城県遺跡登録番号 18018)
2. 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 櫻井茂男
3. 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 亀山文夫

所 在 地	調査面積	調査期間	調査員	調査参加者
第13次調査 高崎一丁目117-6	185m ² (対象面積216m ²)	平成6年7月4日~ 7月29日	石川俊英	阿部 弘・奥田健男・加藤昭一・加藤正士・蝶田 傳・鈴木太介・鈴木秀二・星 秀雄・渡辺正一
第14次調査 高崎一丁目14-1	257m ² (対象面積416m ²)	平成6年8月24日~ 8月31日	千葉孝弥	浅沼 良・奥田隆男・加藤昭一・松本喜一 (遺物整理) 須藤美智子・伊藤美恵子・下山美香
第15次調査 高崎二丁目246-14、 246-19	200m ²	平成6年9月7日~ 9月28日	瀬口 卓 武田健市	阿部 弘・進藤一代・奥田隆男・加藤昭一・菅野文夫・熊谷サツキ・後藤恵子・桜井エイ子・松本喜一 (遺物整理) 大山真由美・黒田啓子・陶山喜美栄・高橋知賀子
第16次調査 高崎一丁目15-1 外 6筆	2,137m ² (8.530m ²)	平成7年6月19日~ 8月28日	千葉孝弥	浅野 真・阿部トシコ・内海義雄・ 長田栄太郎・後藤しのぶ・小松まり・ 今野孝男・森藤ゆき子・南城美枝子・ 松本喜一・水谷朝治・渡辺正一・渡 辺ゆき子 (遺物整理) 柏倉常代・ 浦風志恵子・鹿野智子

I. 遺跡の位置とこれまでの調査成果

高崎遺跡は本市のほぼ中央部に所在する遺跡である。多賀城廃寺を取り込むように南北約1.1km、東西約1.2kmの範囲に広がっており、その大部分が標高16m未満の低丘陵になっている。昭和55年度以降、多賀城市教育委員会によって継続的に調査が行われ、古墳時代前期から江戸時代に至る遺構・遺物が発見されている。それらの概要については以下の表の通りである。



番号	地名	面積(ha)	時期	特徴
1	高崎遺跡	1.1	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
2	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
3	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
4	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
5	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
6	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
7	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
8	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
9	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
10	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
11	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
12	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
13	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
14	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
15	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
16	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
17	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
18	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
19	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群
20	高崎遺跡	0.5	古墳時代	古墳時代後期、古墳群

第1図 調査区位置図・成果一覧表

II. 第 13 次 調査

1. 調査に至る経緯と経過

本調査については、個人住宅建築の計画が提示されたため、これについて協議を行った。当該地は高崎遺跡の範囲に含まれており、また開発方法については丘陵を一部削り取るため、事前調査が必要の旨を回答した。その後、申請者より発掘調査の依頼があり、7月4日より発掘調査を開始した。はじめに重機を使って表土剥離を行なった。調査区内は堆積層がなく、すぐに地山が露出した。表土からは古代の土器類が若干出土した。6日より遺構確認作業に入る。遺構と考えられるものは、調査区を東西に走る溝状のくぼみ1条と、土壤状の落ち込み2基であった。図面作成時に必要な3m×3mの基準点を設定する(19日)。調査は各遺構の写真撮影、土層断面図及び、平面図作成を行なった後、地形測量を行ない7月29日終了した。

2. 調査成果

発見された遺構は、溝跡1条と浅い土壤状の落ち込み2基である。これらはいずれも地山上で見つかっている。いずれの遺構からも遺物は出土しなかった。以下、概要を記述する。

S D1163溝跡

調査区南側で発見した東西溝である。S K1165と重複しており、それより新しい。規模は幅0.67~1.02m、深さ0.28mである。溝の両端は、調査区外に延びているため、11.4mまでしか確認できなかった。埋土は上層より暗褐色土、黒褐色土、黄褐色土で層中に地山土を含んでいる。これらの層は木の根等で擾乱を受けたしまりのない土であることから、本溝跡は近世以降のものと考えられる。

S K1164土壤

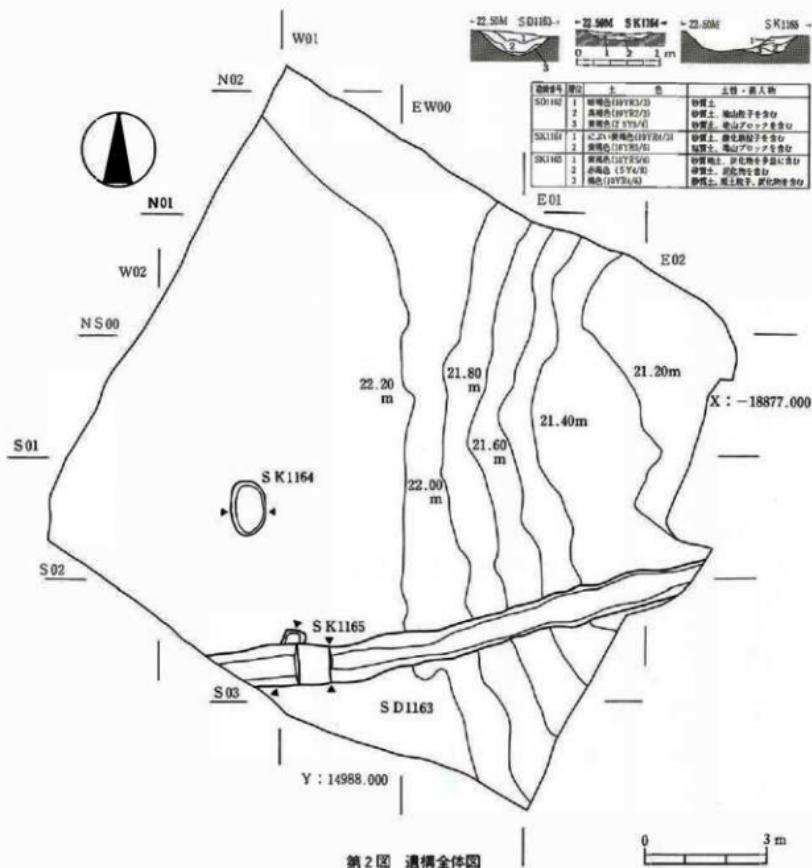
調査区東側で発見した。平面形は梢円形をなし、規模は長径1.32m、短径0.83m、深さ8cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられる。黄褐色土を主体とし、層中には酸化鉄粒子、地山ブロックを含んでいる。

S K1165土壤

調査区南側で発見した。S D1163よって南側を失っている。平面形は残存している所で見ると方形である。規模は東西0.49m、南北0.32m以上で、深さは0.21mである。埋土は上層より黄褐色土、赤褐色土、褐色土である。層中には焼土粒子、炭化物を多量に含んでいる。

3. 小結

1. 調査の結果、発見された遺構は溝跡1条と、土壤2基である。
2. これらの遺構の年代については、出土遺物がないため不明である。



第2図 遺構全体図



調査区全貌

III. 第14次調査

1. 調査区の位置

本調査区は、多賀城廃寺の北東約200mの地点であり、緩やかな丘陵北斜面に所在している。本地点より南側においては平坦面もみられるが、北側は大小の谷が発達した複雑な地形となっている。

2. 調査に至る経緯と経過

本調査は、高崎一丁目14番1における資材置場建設に係るものである。その予定地は建設中の都市計画道路（史跡連絡線）に面しており、同道路の建設計画では現地表を掘削して路面を造成することになっているため、資材置場も路面と同じ高さに掘削して造成したいという意向であった。対象地区周辺においては、平成4年に北側隣接地で個人住宅建設にかかる緊急調査を実施しているが遺構・遺物は発見されていない。また、西側隣接地においては平成5年度から都市計画道路（史跡連絡線）に係る調査を実施しており、わずかに東西溝2条と土器埋設遺構を発見している。このように、当該地周辺における遺構の分布は極めて希薄であると判断され、第12次調査と並行して調査を実施することに決定した。

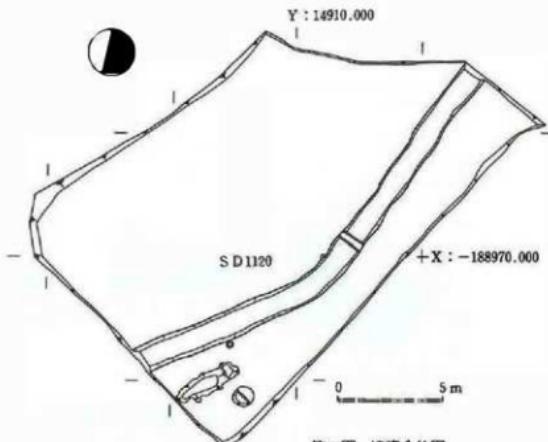
調査の経過は次のとおりである。

8.24 調査区の境界確認。南端部に東西トレーンチを設定し、重機にて表土剥離を行う。地山面上で東西溝1条発見。8.25 引き続き東西溝の検出作業。8.26 東西溝の堆積土掘り下げ開始。1層から土器や瓦出土。8.29 東西溝の堆積土掘り下げ作業と並行してトレーンチを北側に拡張。8.30 東西溝堆積土掘り下げ作業終了。北側拡張部分の遺構検出作業を行うが遺構なし。8.31 調査区写真撮影。第12次調査区から測量の基準点を移動し、20分の1で平面図・断面図作成。調査終了。

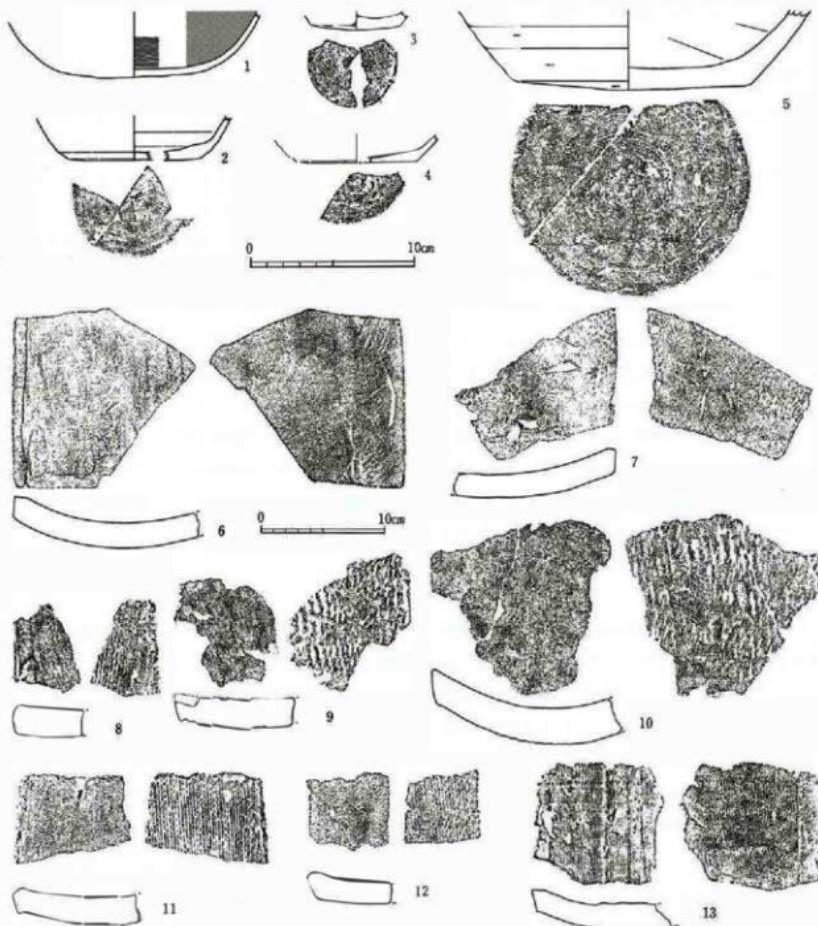
3. 発見した遺構と遺物

表土の下は赤褐色のローム層からなる地山である。その層上で溝跡1条を発見した。

S D1120は調査区のやや南側で発見した溝跡である。西側の第12次調査区から続いており、更に調査区外東側へ延びている。第12次調査区分と合計すると東西約37mにわたって検出したことになる。西半部は東で北に約23度、東半部は約55度偏しており、大きく屈曲している。上幅約1.4m、下幅約1.0mであり、深さは0.16~0.39mである。底



第3図 遺構全体図



番号	遺物名	特徴		直径mm	基準番号
		外観	内部		
1	土鍋裏杯	【外観】底部：手持ちハラクズリ、【内部】全体：ヘラミガキ、黒色結晶			R-4
2	瓶底盤杯	【外観】全体：ロクロナデ、底盤：ヘラ切り、【内部】ロクロナデ			R-5
3	瓶底盤杯	【外観】全体：ロクロナデ、底盤：ヘラ切り、【内部】ロクロナデ			R-6
4	瓶底盤杯	【外観】全体：ロクロナデ、底盤：ヘラ切り、【内部】ロクロナデ			R-7
5	瓶底盤杯	【外観】全体：ロクロナデ、底盤：黒色ヘラクズリ、【内部】ロクロナデ			R-9
番号	遺物名	特徴		直径mm	基準番号
		外観	分類		
6	平瓦	横巻き作り	【A-H型】		R-17
7	平瓦	横巻き作り	【B-H型】底切一筋一筋底面ノーナー一筋セビ底面、【凸面】溝印き目→第二次目→一筋		R-16
8	平瓦	一枚作り	【H型】右目一ナード、【凸面】溝印き目（つぶれ谷）		R-21
9	平瓦	一枚作り	【H型】右目一ナード、【凸面】溝印き目（つぶれ谷）		R-20
10	平瓦	一枚作り	【H型】右目一ナード、【凸面】溝印き目（つぶれ谷）		R-19
11	平瓦	一枚作り	【H型】右目一ナード、【凸面】底面左底面一ナード、【凸面】底面右底面（縫かい・つぶれ谷）		R-15
12	平瓦	一枚作り	【H型】凸面左底面一ナード、【凸面】溝印き目（縫かい・つぶれ谷）		R-14
13	平瓦	一枚作り	【H型】底切一筋一筋底面・側面左底面一ナード、【凸面】溝印き目一シコナデ		R-18

第4図 SD1120第1層出土遺物

面はほぼ平坦であり、東側から西側へ向かってわずかに傾斜している。比高差は約0.2mである。堆積土は2層に区分することができ、1層は地山に類似した黄褐色砂質土、2層はにぶい黄褐色砂質土である。

遺物は1層から土師器杯・甕・須恵器杯・高台杯・高杯・蓋・甕・瓶・丸瓦・平瓦、羽口が出土している。いずれも破片で全体の知れるものはない。土師器杯には底部破片資料が4点ある。第4図1は非クロ調整の杯である。底部はやや丸底気味であり、摩滅しているため細部の観察が困難であるが砂粒の動きが観察できることから手持ちヘラケズリを行っていると見られる。体部から底部にかけては緩やかに移行しており、クロ調整を行っていない可能性が高い。この他、糸切り痕がわずかに残存しているものが1点、クロ調整後手持ちヘラケズリを施しているものが1点出土している。土師器甕には口縁部破片資料が2点ある。その内の1点は、口縁部が肥厚し、体部との境に沈線が巡っている。外面はヨコナデ調整、内面はハケメ調整が施されている。須恵器杯には底部破片資料が3点ある。いずれも、クロから切り離しはヘラ切りである。2は底部外面に「×」のヘラ描きがある。焼成前に施されたものである。また、口縁部破片資料の中には灯明皿として使用された痕跡をとどめているものが1点ある。須恵器甕には底部破片資料が2点ある。5は体部下端から底部全体が回転ヘラケズリ調整されているものである。内面底部が丁寧にクロナデ調整されていることから鉢に近い形態と推定される。瓦は、丸瓦と平瓦が出土しており、平瓦についてみると、多賀城政府第Ⅰ期のもの（6・7・11・13）、第Ⅱ期のもの（9・10）、第Ⅱ期か第Ⅲ期か判断が難しいもの（8・12）などがある。羽口は破片が2点出土している。その内の1点は外面に赤褐色やオリーブ色の溶解物が付着している。

4. 遺構の年代

S D1120から出土した土師器杯は非クロ調整のものとクロ調整のものとがあり、後者にはクロ調整後手持ちヘラケズリを施したものがある。甕はクロ調整を行わないものである。また、須恵器杯はすべてヘラ切り無調整のものである。赤焼き土器は出土していない。このような土器群の特徴は白鳥良一氏の「多賀城跡出土土器の変遷」（註）によるとB・C・D群土器と分類されているものに認られる。B群土器は8世紀末頃、D群土器は9世紀後半頃とされている。瓦については、多賀城政府第Ⅱ期ないし第Ⅲ期の平瓦が最も新しいものである。政府第Ⅲ期は780年から869年までであり、瓦が廃棄される状況を考えれば9世紀後葉の年代が与えられよう。S D1120溝1層出土資料はいずれも破片資料であり、出土量も少ないことから、8世紀末から9世紀頃と幅をもたせて捉えざるをえない。本溝跡の年代についてもおおよそその頃と考えておきたい。

5.まとめ

- 丘陵北斜面において溝跡を1条発見した。
- 溝跡の年代は8世紀末から9世紀後半頃であり、性格については不明である。

（註）白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』VI 宮城県多賀城跡調査研究所 1980

IV. 第15次調査

1. 調査にいたる経緯

本調査については、平成6年8月に塩釜中央不動産より当該地における宅地造成計画の提示があり、本件開発計画について協議を行った。開発は盛土造成であるため地下に影響は及ぼないとのことであったが、丸山団古墳群1号墳に隣接することから、確認調査が必要である旨を回答した。その後、塩釜中央不動産より発掘調査の依頼があり、調査の日程、費用の調整等を行い、9月7日より調査を開始した。

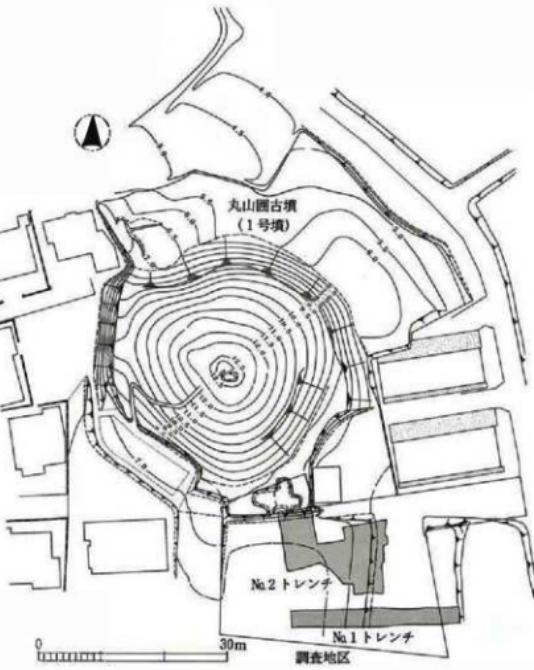
2. 調査経過

今回の調査対象地は、第10次調査区（現高崎中学校）の西側、丸山団古墳群1号墳の南側の低丘陵上に位置する。調査に際し2カ所のトレンチを設定し、南側をNo1トレンチ、北側をNo2トレンチとした。9月7日、小雨の降るなかNo1トレンチから重機を使用して表土剥離を行う。その結果、両トレンチとも西半分は現表土を除去すると明黄褐色の地山（岩盤）が現れた。一方、東半分では黒色粘質土層が広く堆積していたが、この層からはビニール袋やガラス瓶などが出土していることから重機を用いてその除去にあたる。9月8日から作業員を導入し

て遺構の検出作業を開始し、検出が終了したものから写真撮影を行う（～9月12日）。9月12日、本調査区の北側にある古墳時代中期の円墳といわれる丸山団古墳群1号墳の周溝を確認するためNo2トレンチの北西部を拡張したが、古墳に関連するような遺構、遺物は発見できなかった。9月19日、実測図作成のための基準点を設置し、翌日より、20分の1のスケールで実測図の作成を行う。また、発見した遺構の年代を把握するためにS K1168土壤を掘り下げる（9月21日～28日）。その間、9月22日に集中豪雨に見舞われたが、9月28日に調査の全作業を終了した。

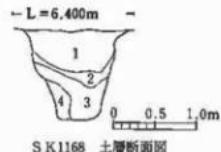
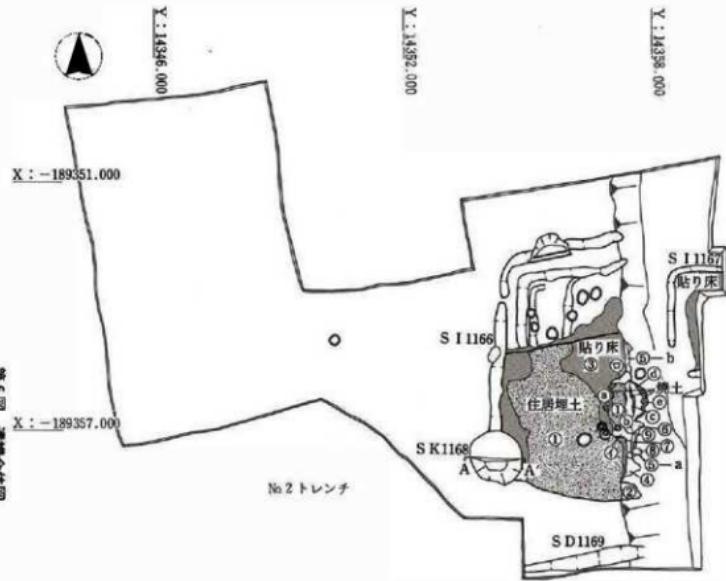
3. 発見遺構と遺物

No1トレンチから竪穴住居跡2棟、土壤1基、溝跡1条、No2ト



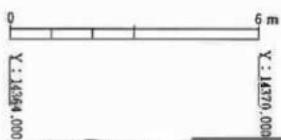
第5図 調査区位置図

図9: 地質図



番号	土・土性	地入地帯	地
1	褐褐色シルト (DVR3/J)	褐色色を呈するものである。荷山を形成する。	褐色地帯上段1-1
2	褐褐色粘土 (DVW5/J)	褐色を呈するものである。	褐色地帯上段1-2
3	褐褐色粘土 (DVW5/J)	褐色色を呈するものである。	褐色地帯上段1-3
4	明褐色粘土 (DVW5/J)	褐色色を呈するものである。	褐色地帯上段1-4

S I 1166 土層観察表



レンチから多数のpitを発見した。すべて地山での検出である。SK1168以外は遺構の堆積土を掘り下げていないため、出土遺物は整理用天箱で3個にまとまつた。

<豊穴住居跡>

S I 1166

No.1 トレンチ東側で発見した住居跡である。上面での削平が著しく、中央から南辺にかけて堆積土が薄く残る程度であり、それ以外は床面と周溝が露出していた。東半部は後世の搅乱により大きく削り取られていた。それらが露出した部分の観察から本住居は数回の建て替えがあるとみられる。しかし上面での遺構検出に留めたため、古い時期の規模等については不明である。ここでは比較的規模が判明した新しい住居について報告する。住居の規模は南北5.2~6.6m、東西4.2m以上である。方向は西辺でみるとN-7°-Eである。南西隅でSK1168と重複し、それより古い。貼り床は褐灰色粘質土を主体とし、径1~2cmの小ブロック状の明黄褐色土（地山）が混入している。北半部で住居に伴うと見られる柱穴を6個検出しているが、どの時期のものかは不明である。周溝は幅0.28~0.3m、深さ約0.3mであると推察され、北西隅で一端途切れる。カマドは、住居のやや南側の搅乱に壊された地点で炭化物と焼土が多量に混入する層を検出していることから、その部分と考えられる。遺物は堆積土から土師器甕・須恵器杯・高台付杯が出土地している（図3）。

なお、本住居の古い時期のものについては、北半部において3時期の周溝を、東半部の断面においても3時期の周溝と床面および焼土層を確認した。いずれも本住居の床面に覆われている。焼土層は本住居カマドの下層で検出してたものである。本住居のものを含めると間層を挟み3層確認でき、その比高差は0.37mである。これらのことから本住居については同位置で3回の建て替えが行われていたことがうかがえるが、詳細は明らかでない。

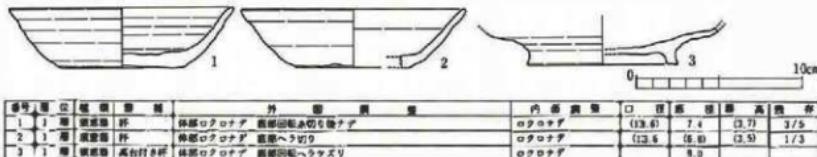
S I 1167

S I 1166の東側で発見した住居跡である。上面がほとんど削平されており、周溝と床面が露出していた。平面形は方形であり、規模は南北2.7m、東西1.3m以上である。方向は西辺でみるとN-4°-Wである。灰色粘質土を貼り床としている。周溝は幅0.15~0.2mで、南西隅は残存していない。カマドは今回の調査区内では発見できなかった。

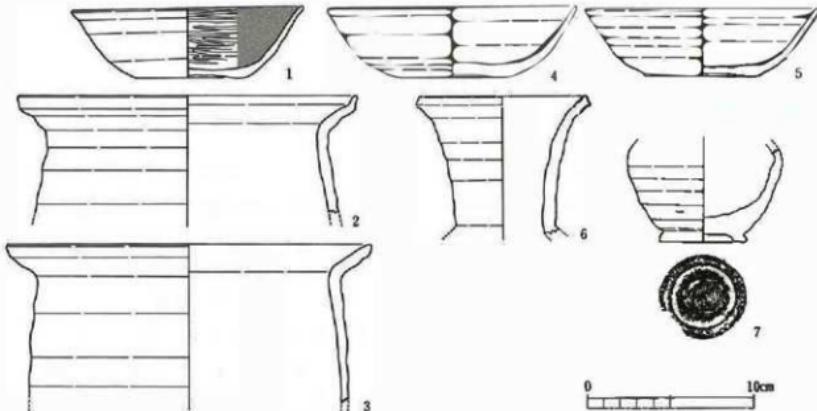
<土 壤>

SK1168

SK1166の南西隅を壊して掘り込んでいる。上幅は最大2.62m、下幅は最大0.9m、深さ1.1mで、底面に凹凸は見られない。埋め土は4層に大別でき、第1層および第2層から土師器甕・甕・須恵器杯・甕・瓶・瓦など多くの遺物が出土している（図4）。



第7図 S I 1166出土遺物



番号	相位	種類	特徴	外面調査				内面調査	口径	底径	壁厚	高さ	残存率
				底盤	側面	縁	脚						
1	1 相	土師器	杯	底盤ロクロナデ	底盤側面あわせ	ヘラカタ		ヘラロガキ赤色絞型	14.0	6.6	4.2	1	
2	1 相	土師器	甕	ロクロナデ				ロクロナデ	(20.4)				
3	1 相	土師器	甕	ロクロナデ				ロクロナデ	(22.0)				
4	1 相	須恵器	杯	底盤ロクロナデ	底盤側面あわせ	ロクロナデ		ロクロナデ	(15.0)	(7.0)	(4.0)	1/2	
5	1 相	須恵器	杯	底盤ロクロナデ	底盤ヘラ切り	ロクロナデ		ロクロナデ	(14.0)	(6.0)	(4.0)	2/5	
6	1 相	須恵器	高台付杯	ロクロナデ				ロクロナデ	10.0				
7	1 相	須恵器	甕	底盤側面ヘラカタ	底盤側面ヘラ切り	ロクロナデ		ロクロナデ		5.2			

第8図 SK 1168出土遺物

<ピット群>

No 2 トレンチ東側のやや緑色にグライ化した岩盤上で28個検出した。平面形はほとんどが円形あるいは橢円形であり、柱痕跡を確認できたものが2個ある。今回の調査区内では明らかにできなかったが、これらのピット群が何らかの建物を構成する可能性も考えられる。

4. 遺構の年代

今回の調査は確認調査であり、基本的に遺構の堆積土は掘り下げていない。ここでは唯一掘り下げたSK 1168およびそれより古いS I 1166の年代について考えてみる。

S K 1168から出土した遺物には、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶、瓦がある。赤焼き土器は含まれていない(註1)。土師器はほとんどがロクロを使用している。杯類についてみると底部の切離し技法が判別できたものは、土師器では回転糸切りのものが3点、須恵器ではヘラ切りのものが1点、回転糸切りのものが3点である。いずれも再調整は認められない。このような土器の組み合わせは、白鳥良一氏による多賀城跡出土土器の分類(註2)のうち「C群土器」・「D群土器」に分類されているものと類似している。年代については「C群土器」が9世紀前半、「D群土器」が9世紀後半とされていることから、本土壌出土の土器についても概ね9世紀頃の年代が考えられる。従って本土壌についてもその頃の年代と考えておきたい。

S I 1166から出土した遺物には土師器甕、須恵器杯・高台付杯がある。遺構の堆積土を掘り下げていな

いため、すべて検出時にその上面から出土したものである。土師器壺は口縁部の破片で非クロクロ調整のものである。須恵器杯についてみると、底部の切離しがヘラ切り無調整のものが6点、回転糸切りのものが1点である。後者については切離し後底部周縁に手持ちヘラケズリを施している。高台付杯は回転ヘラケズリ後高台を貼付したものである。須恵器杯では切離し後手持ちヘラケズリを施すものは前途した多賀城跡出土土器のうち「C群土器」に少量、「E群土器」・「F群土器」に若干存在するとされている。本住居については「C群土器」・「D群土器」段階と見られるSK1168よりも古いこと、底部切離しがヘラ切り無調整の杯が多いことなどからも「C群土器」に類似すると考えられる。資料的には制約があるものの、本住居推積土から出土した土器も概ね「C群土器」とみることができる。また「C群土器」の年代が9世紀前半とされていることから、本住居の構築年代についてはそれ以前と考えておきたい。

5. まとめ

1. 今回の調査では、堅穴住居2棟、溝1条、土壙1基、多数の小ピットを発見した。
2. 遺構の年代は、SI1166が9世紀以前、SK1168が9世紀頃と考えられる。その他の遺構については不明である。

(註1) 本報告で言う赤焼き土器とは、宮城県多賀城跡調査研究所で須恵系土器と呼ばれているものと同一のものである。

(註2) 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要VII』1980



SI1166住居跡（東より）

V. 第16次調査

1. 調査区の位置と地形

本調査区は、多賀城廃寺の北東約250m、JR東北本線の南側に所在している。ここは高崎丘陵の北斜面であり、西側から東側に向かって入り込む大きな谷の奥まった部分にあたる。

調査区の地形を細かく見ると、北半部が緩斜面、中央部が谷、南半部が急斜面と大きく区分され、起伏に富んだ地形となっている。南半部については、東側の一部に狭い平坦面と緩斜面もみられるが、大部分は北向きの急斜面であり、裾部との比高差は約9mである。中央部は二つの谷とそれらに挟まれた幅6~8mの狭い平坦面からなっている。北側の谷は調査区の東側から続いているものであり、南側の谷は調査区西端部からはじまっているものである。北半部は南側と西側へ広がる緩斜面である。なお、この緩斜面の北端部は東北本線で分断されているが、かつては小沢原遺跡の所在する浮島地区の丘陵に続いていたと考えられる。

2. 調査に至る経緯

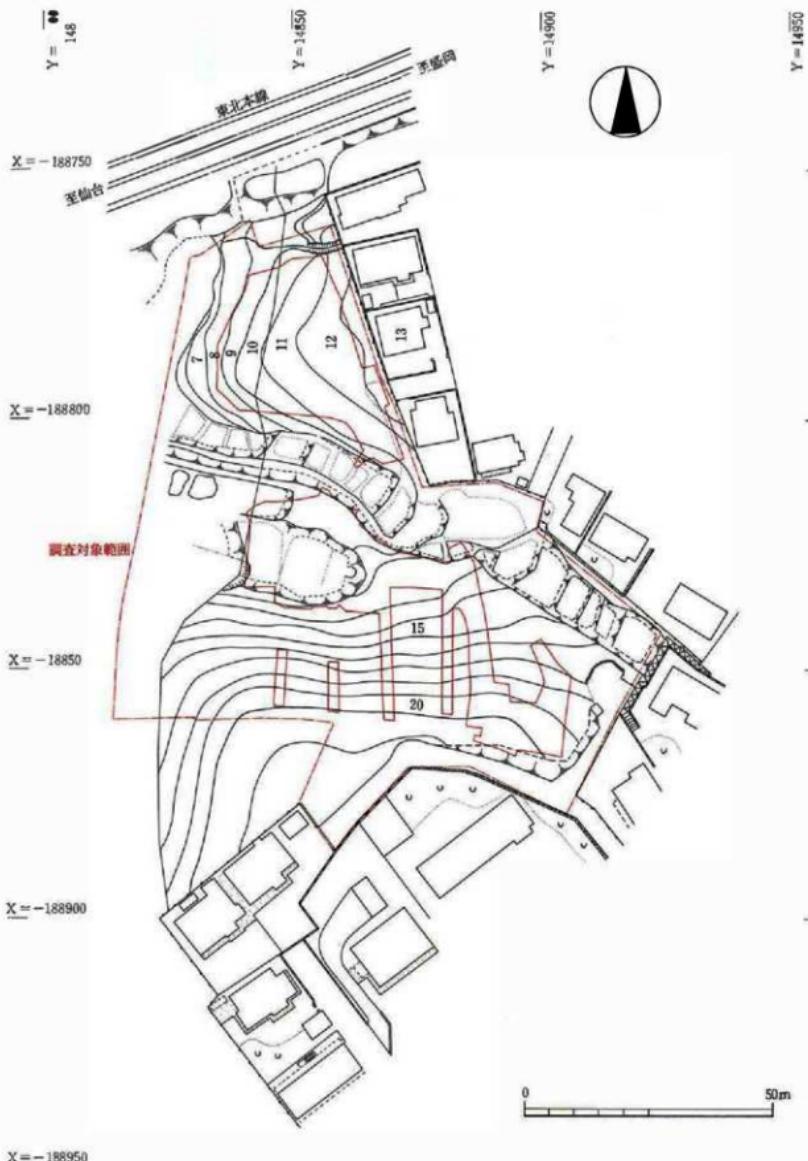
今回の調査は、都市計画道路（史跡連絡線）の代替地造成工事に係るものである。本件については、平成6年10月25日付で多賀城市土地開発公社から教育委員会へ事前協議書が提出された。開発計画によれば、対象地区南半部の丘陵北斜面については部分的に削平するが、その他の地点については盛り土し、既存の住宅地の高さに合わせせる、というものであった。対象地区は、埋蔵文化財包蔵地として高崎遺跡の範囲に含まれるもの半分以上が急勾配の斜面や谷であり、現況から判断する限り遺構の存在する可能性は低いという予測がなされていたが、遺構が発見された場合については南半部は事前調査、その他の地点については確認調査を行うということで発掘調査を実施することとした。その結果、調査区全体から遺構が発見されたが数が少なく、しかも開発計画では対象地区全体に大規模な盛り土を行うことになっているため、現在の環境とは大きく変わることが予想された。よって、6月28日にすべて事前調査で対応することに調査方法を変更した。

現地は全体が山林となっているため、それらの伐採と対象地区外への搬出を持ち、6月19日から調査を開始した。

3. 調査方法と調査経過

前述のように、本調査区は起伏に富んだ地形となっている。以下、便宜的に北半部の緩斜面をA区、中央部の谷と南半部の丘陵斜面をB区として記述する。

A区については全体にわたって表土を剥離し、遺構検出作業を行うこととした。一方、B区については南半部の急傾斜面にNo.1~4トレンチ、南半部東側の平坦面にNo.5トレンチ、中央部の狭い平坦面にNo.7トレンチをそれぞれ設定し、遺構が存在した場合その範囲についてのみ拡張していく方法を探った。遺構の実測方法は、遺構の分布が希薄であることおよび急斜面が存在することなどを考慮し、1/100のスケールによる平板実測と1/20のスケールによる遺方実測を併用した。いずれの方法においても実測基準線は国土座標の方位に合わせている。



第9図 調査区位置図

W64 | W48 | W36 | W24 | W12 | EW00 | E12

N246

N234

N222

N210

N186

N174

N162

N150

N138

N126

S D1181

A区

S K1177

S D1182

S B1171

S B1172

S K1185

S K1174

S I1173

N186

B区

S E1183

S K1175

S D1180

S D1184

S D1179

S D1178

No.1 トレンチ

No.2 トレンチ

No.3 トレンチ

No.4 トレンチ



第10図 遺構全体図

調査の経過については以下のとおりである。

- 6.19 器材搬入。B区No.1～5トレンチ設定。作業員により
No.1～3トレンチの表土剥離。
6.20 前日の作業続行。
6.21 雨のため、重機によりNo.3～5トレンチの表土剥離。No.5
トレンチにおいて東西溝2条、南北溝1条発見。A区表土
剥離開始（～6.28）。
6.22 A区南東隅において竪穴住居1棟発見。
6.23 No.5トレンチの西北溝隣接を証張。No.7トレンチを設定
し、表土剥離開始（～6.29）。
6.26 No.7トレンチ北側と南側の沢を一部掘削。北側の沢は浅
く、表土下で灰白色火山灰ブロックを確認。
6.28 各トレンチの構造検出作業が一応終了。この時点では事前
調査で対応することに決定。
6.29 No.7トレンチ北端部においてS D1180を覆う沢の堆積土
を掘り上げる。
6.30 S D1180一部断ち割れ。実測図作成のため基準点設定。
7.6 S E1183完掘。重機による表土剥離終了。
7.7 S D1181・1182堆積土掘り下げ開始。ベンチマーク移動。
No.7トレンチ西端部表土除去。S K1175堆積土1層を掘り
下げ、堆土・炭化物層を検出。
7.10 S D1181・1182堆積土掘り上げ終了。S D1181東端部で
それより古い溝と土壤状の落ち込みを検出（後に風洞木と
判明）。S E1183断面図作成。
7.12 S D1181・1182写真撮影。
7.13 S D1180検出作業。
7.14 S D1180堆積土掘り下げ（～7.17）
7.15 No.5トレンチ一部表土剥離。
7.16 S E1183セクションベルト除去。写真撮影。
7.19 S K1175堆積土掘り上げ。
7.20 S I1173堆積土掘り下げ開始。
- 7.21 B区東半部の滑掃、写真撮影。S K1176・S D1184堆積
土掘り下げ開始。
7.24 S D1178～1182平面図作成（100分の1）。S D1181・
1182レベル計測。
7.25 S D1179とS D1180の関係を見るため一部抜張。一連の
連携であることを確認。
7.26 No.1～4トレンチ第III層掘り下げ。No.1・2トレンチ平
面図作成。
7.27 S I1173堆積土断面図作成。
7.28 空中写真撮影。S E1183北側の竪穴状の落ち込みを掘り
下げる。すべて近代以降のものと判明。B区東半部レベル
計測。
7.31 S I1173セクションベルト除去。溝埋積土を掘り下げる。
S K1175周辺を抜張。
8.1 A区南端部の谷の堆積土掘り下げる（～8.2）
8.2 S E1183東側のIII層より灰白色火山灰ブロックを検
出。
8.4 お盆休みに備えて現場封鎖。
8.5 お盆休み（～16）。
8.17 S I1173遺物出土状況写真撮影。S E1183石敷きを滑掃
し、写真撮影。
8.18 S I1173カマド周辺検査。S K1174・1177堆積土掘り上
げて断面図作成。
8.21 S I1173主柱穴検出作業、発見できず。
8.22 S I1173遺物取り上げ。
8.23 S I1173の北でS B1171・1172を発見。
8.24 S I1173、S B1171・1172平面図作成。
8.25 S I1173、S B1171・1172断面図作成。
8.28 S B1171・1172の柱穴断面図作成後、埋土を掘り上げる。
調査終了。

4. 層序

A区は表土の下が直接地山になっている。一方、B区では丘陵頂部に近い南東隅と丘陵の裾にあたる中
央部において堆積層が認められた（第22図、図版2右下参照）。

- I層 現在の表土である。
- II層 調査区南東隅に分布する褐色（10Y R4/6）砂質土である。III層の上に直接堆積しており、
厚さは約8cmである。西側から東側へわずかに傾斜している。S D1180は本層上面から掘
り込んでいる。
- IIIa層 調査区南東隅に分布する暗褐色（10Y R3/4）砂質土である。地山の上に直接堆積しており、
II層に直接覆われている。厚さは15～30cmである。10世紀以降の土器片が混入している。
- IIIb層 調査区中央部の斜面裾部に分布する暗褐色（10Y R3/3）砂質土である。現代の盛土の下で
確認したのであり、地山の上に直接堆積している。上面には褐色土小粒が多く混入して
いるがそれ以外は均質である。部分的な断面観察によると地山面に堆積した10世紀前半の
灰白色火山灰ブロックを直接覆っている。厚さは約25cmである。
- IV層 調査区南東隅に分布する黄褐色（10Y R5/4）土である。地山の漸移層かと考えられる。
IIIa層とIIIb層には直接的および間接的重なりが認められない。しかし、いずれも地山直上に堆積して

いること、土性と色調が類似していること、III b 層上面に混入している褐色土がII 層に類似していることなどから両者は層位的に対応関係にある可能性が高いと考えられる。10世紀以降の旧表土と見ておきたい。

また、谷の堆積層の状況を知るため、北の谷（A区とB区のほぼ中間）を部分的に掘り下げたところ、現在の表土の下に10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰の小ブロックを含む亜泥炭層があり、その下は岩盤であった。A区南端部においては谷の立ち上がりが認められ、地山ブロックを含む黄褐色砂質土が堆積していた。一方、南の谷については約7.5mにわたって堆積層の断面観察を行った。底面には、地山の崩壊土やそれらを多く含む厚い層があり、南北両壁方向から中央部に向かって傾斜して堆積している。中央部よりやや北壁に近いところではその上に灰白色火山灰の二次堆積層があり、それを抉るように灰白色火山灰の小ブロックを含む亜泥炭層が堆積している（第27図参照）。

5. 発見した遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構は、古代の掘立柱建物2棟、竪穴住居1棟、土壙3基、溝6条、近代の井戸1基、年代不明の土壙2基である。以下、地区ごとに説明する。

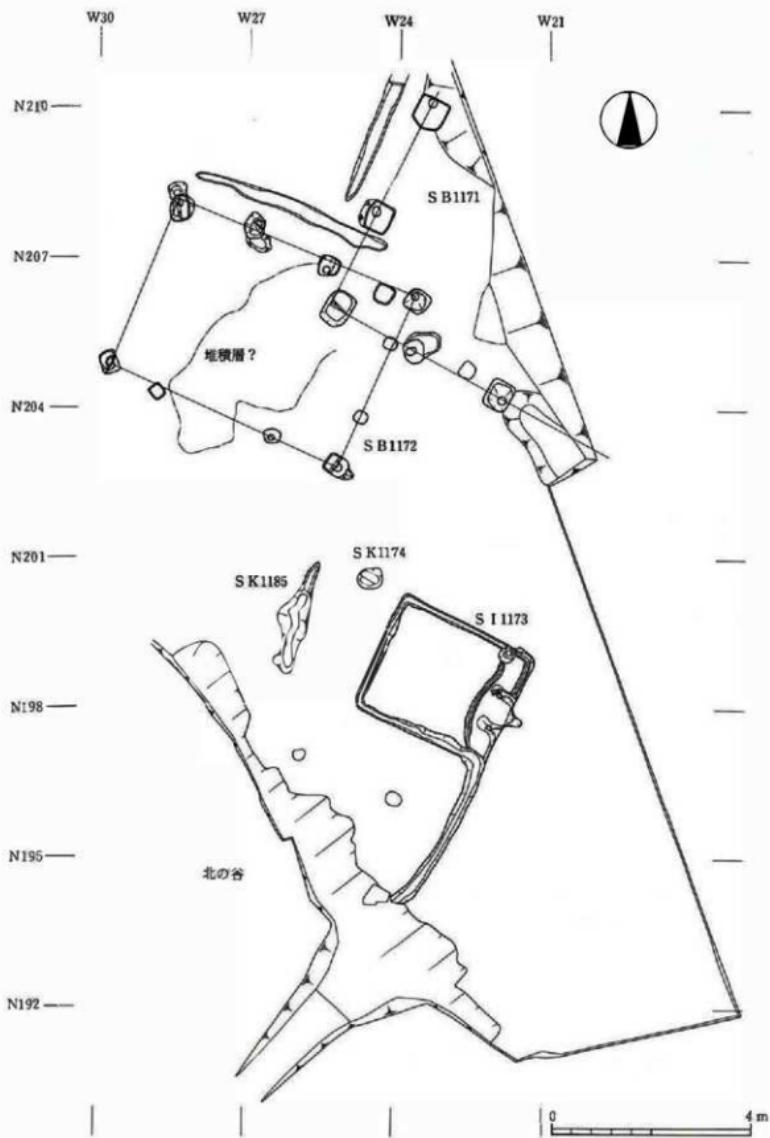
A区

(1) S B1171掘立柱建物跡

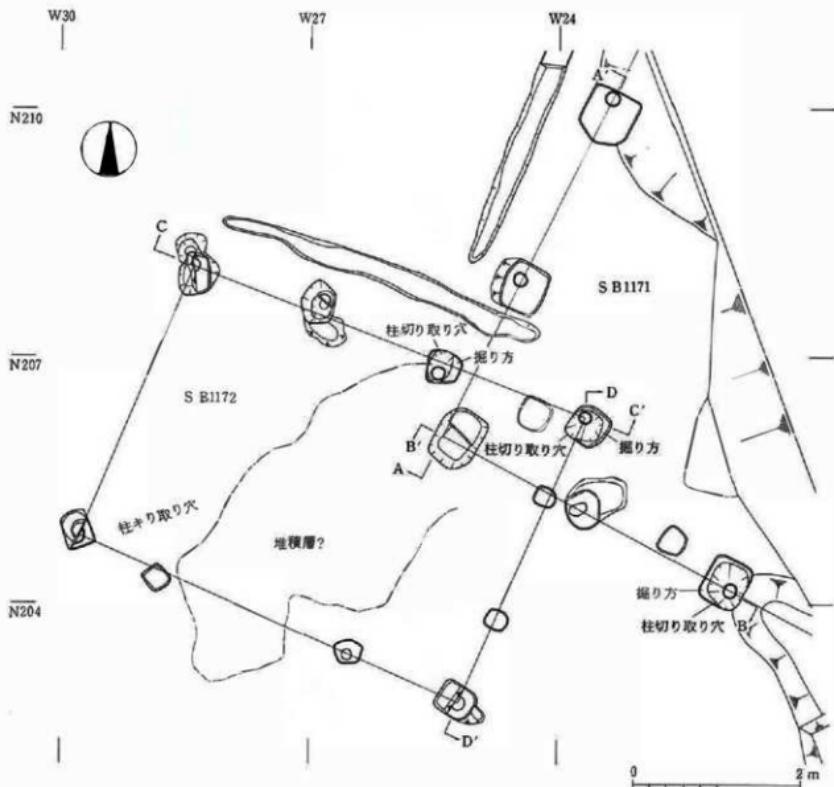
S B1171は中央部東壁際の地山上で発見した掘立柱建物跡である（第11・12図）。調査区外東側へ延びているため、東西柱列、南北柱列とも2間分確認したにすぎない。検出した5個の柱穴の内4個の柱穴で柱痕跡を確認している。東西柱列西より2間目の柱穴では柱切り取り穴を確認している。S B1172と重複しているが、柱穴の直接的な切り合いがないため新旧関係は不明である。本建物の方向は、南北柱列で見る所北で26度59分東へ偏しており、東西柱列で見ると東で28度32分南へ偏している。柱間は、南北柱列が南より約2.1m、2.45mであり、東西柱列が西より約1.7m、2.07mである。柱穴の平面形は、東西柱列中央のものが円形であるほかは長方形を基調としている。規模は、大きなもので長辺70cm、短辺55cm、小さなもので長辺55cm、短辺50cmである。柱は、柱痕跡より径16～19cmである。南北柱列の南から1間目と2間目および東西柱列の西から2間目の柱穴では柱痕跡が柱穴底面に接しているが、東西柱列の西から1間目の柱穴では底面から約10cm上の位置にある。掘り方埋土は、南北柱列の南から1間目と2間目および東西柱列の西から2間目の柱穴は単層あるいは一方向から斜めに堆積しているが、東西柱列の西から1間目の柱穴は互層になっている。南北柱列の底面レベルを比較すると、南端部の柱穴はそれより2間目の柱穴より0.4m低い。遺物は、東西柱列西より2間目の柱穴の掘り方埋土から土師器杯と須恵器甕の体部破片がそれぞれ1点、切り取り穴から須恵器甕の体部破片が1点出土している。いずれも特徴的な部分がないため年代は不明である。

(2) S B1172掘立柱建物跡

S B1172は桁行3間、梁行1間の掘立柱建物跡である（第11～13図）。中央部東壁付近の地表面で発見した。柱穴はすべて検出しており、南側柱列西より1間目の柱穴をのぞくすべての柱穴で柱痕跡を確認している。また、北側柱列東端および東から1間目の柱穴で柱切り取り穴を確認している。本建物の方向は、北側柱列で見ると東で21度6分南へ、南側柱列で見ると東で23度45分南へ偏している。また、東妻で見ると北で23度35分東へ、西妻で見ると北で22度45分東へ偏している。桁行については、北側柱列で総長5.08



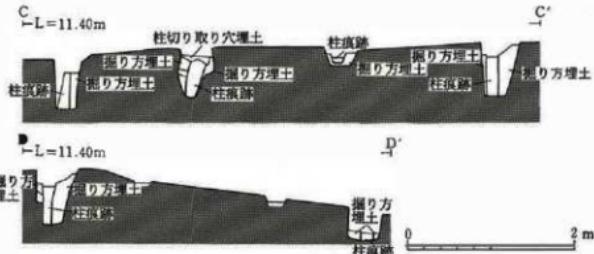
第11図 A区南半部の遺構



第12図 S B1171・1172平面図及びS B1171柱断面図

m、柱間は西から1.62m、1.66m、1.85mであり、南側柱列で総長5.02m、柱間は西から約1.1m、約2.5m(2間分で3.56m)、1.47m

である。梁行については、東妻で3.80m、西妻で3.57mである。柱穴の平面形は、横円形に近い形状のものも



第13図 S B 1171柱穴断面図

あるが多くの場合は長方形を基調としている。規模は、大きいもので長辺50cm、短辺40cm、小さいもので長辺30cm、短辺25cmである。柱は、柱痕跡より径16cmである。掘り方埋土はすべて単層である。柱穴の底面レベルを比較すると、北側柱列は西端が東端より約15cm低く、東妻は南端が北端より約20cm低い。なお、東妻で柱筋上に2個の小柱穴を発見した。柱痕跡を確認していないため、その中心に柱位置を想定すると、両者の柱間は約1.6mであり、両側柱列との柱間はいずれも約1.1mである。遺物は、掘り方埋土から須恵器杯とロクロ調整を施した土師器甕の口縁部破片が各1点出土している。

(3) S I 1173堅穴住居跡

S I 1173は南半部の地山面で発見した堅穴住居跡である(第11・14図)。南西隅は床面まで削平されているが、それ以外は残存状態が良好であり、カマド、カマド前方溝、周溝、外延溝などの施設を検出した。平面形は東西にやや長い長方形であり、規模は長辺2.90~2.97m、短辺2.45~2.50mである。壁高は北東隅で36cmである。

カマド：東壁中央にあり、左右の側壁および煙道の一部が残存している。側壁の外側で計ると90~95cm、内側で計ると45~50cmであり、高さはわずか14cmを残すのみである。側壁はにぶい黄褐色土を貼り付けて構築しており、焚き口に近い部分では石を詰め込んでいる部分もある。なお、東辺の周溝は北側壁の下までのびており、カマドは周溝掘削後に構築されたことが明らかである。

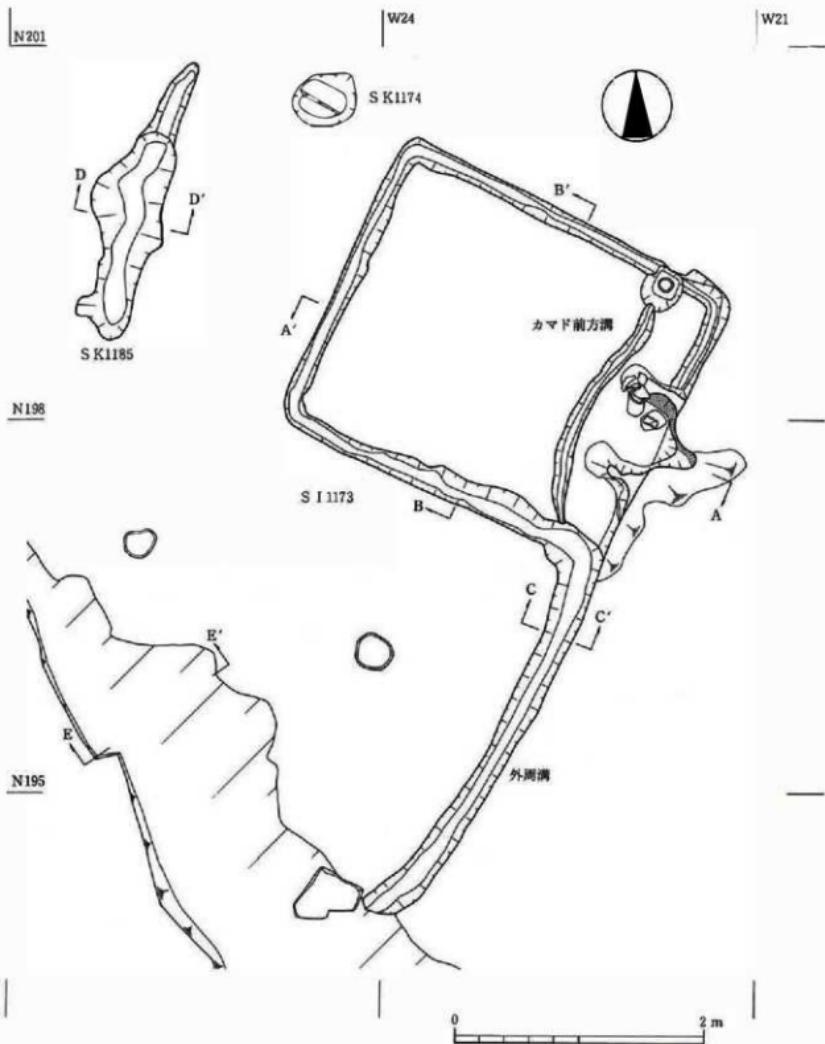
カマド前方溝：北壁の周溝から南壁の周溝にかけて延びる南北溝である。カマド前方で西側に膨らむように緩やかに湾曲しており、規模は幅9~15cm、深さ3~5cmである。底面は北側から南側に傾斜しており、比高差は16cmである。本溝は4b層に覆われている。

周溝：東辺のカマドおよびその南側をのぞく各壁直下に設けられており、南壁の周溝は本住居南東隅で外延溝に連絡している。規模は、東・西・北辺では幅約15cmであるが、南辺では南東隅にむかって次第に幅が広くなっている。各隅の底面レベルを比較すると、北東・北西隅より南東・南西隅が約15cm低くなっている。

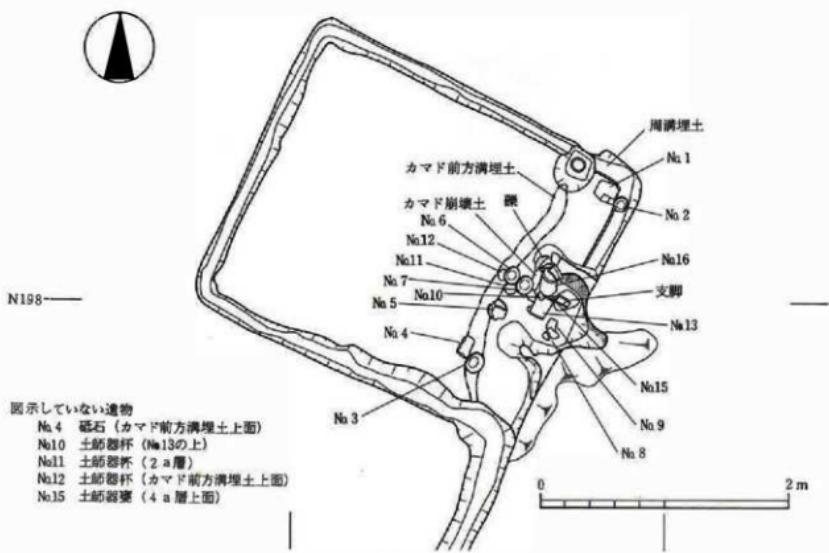
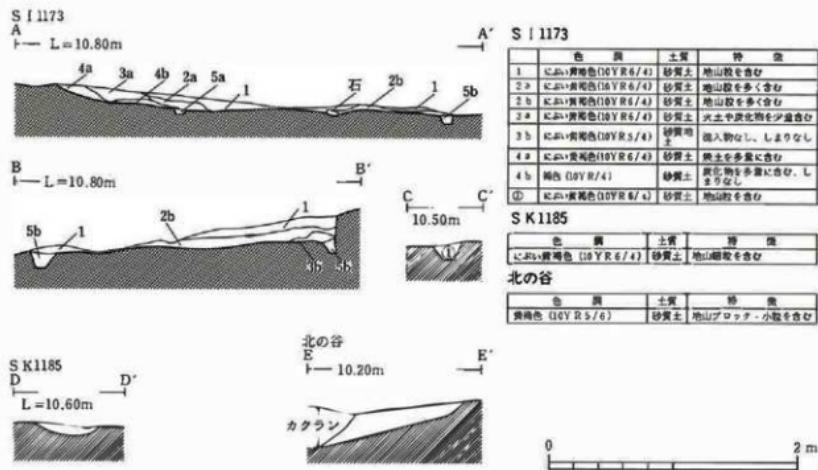
外延溝：住居南東隅から谷にかけて南北3.3mにわたって検出した。規模は、幅20~30cm、深さは10~20cmである。底面は谷に向かって傾斜しており、住居南東隅と谷に接する部分との比高差は40cmである。

堆積土：7層に細分することができる。4a層は焼土を多量に含むカマド内堆積土である。4b層はカマドの前方と側壁北側にのみ分布している炭化物層であり、床面上に直接堆積していることから住居機能時に形成されたものと見られる。3a層は4a層上に直接堆積しており、カマドの崩壊土と見られる。1・2a・2b・3b層は住居廃絶後の堆積層と考えられる(第15図)。

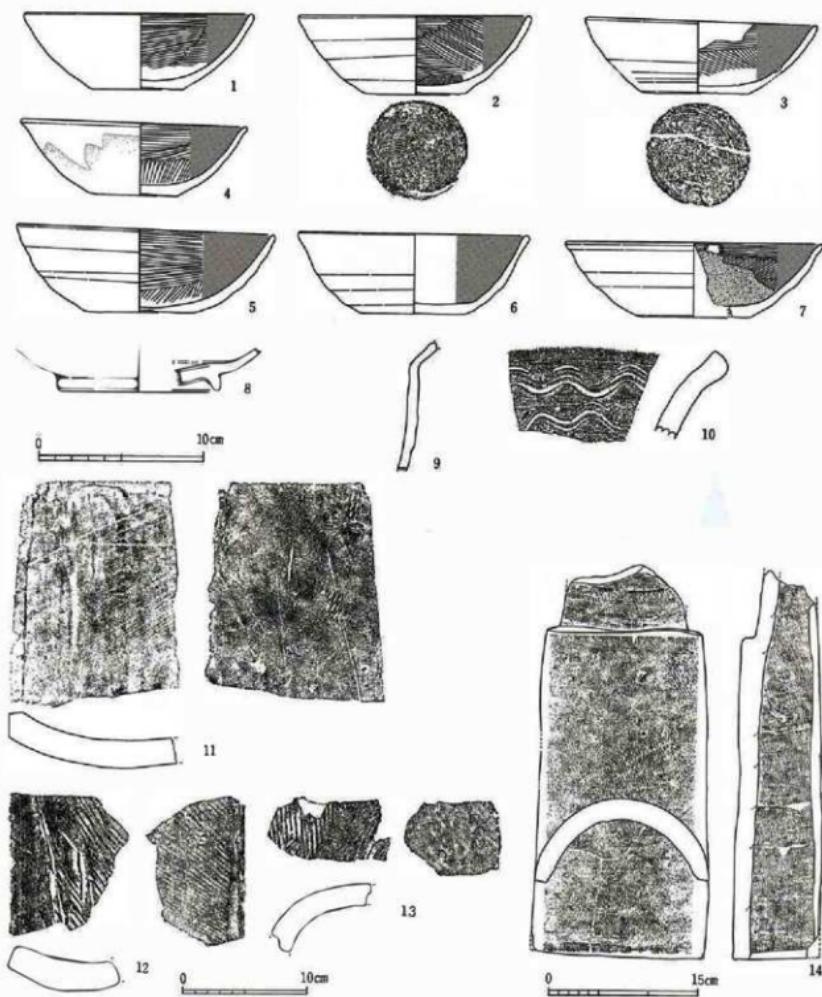
遺物の出土状況：遺物は土師器杯・高台杯・甕、須恵器杯・蓋・甕・瓶、灰釉陶器碗、平瓦、丸瓦、羽口、スラグ、磁石が出土している（表1）。その内、カマドおよびその周辺から完形もしくはそれに近い状態の土師器杯7点と土師器甕が出土している。カマド崩壊土（3a層）から出土したものとカマド内堆積土（4



第14図 S I 1173, S K 1174・1185平面図



a層) 上面から出土したものが接合して1点、カマド内堆積土(4a層)から1点、カマド脇の炭化物層(4b層)上面から2点、カマド前方溝堆積土上面から2点、周溝堆積土上面から1点それぞれ出土している。また、土師器甕はカマド内堆積土(4a層)およびその上面から出土している(第16・17図、表1)。これらは出土層位が異なるが、①平面的な分布状況、②カマド崩壊土やそれを多く含む層(2a層)に直接覆われるという層位的関係から、周溝およびカマド前方溝の埋没からカマド崩壊までの時間幅の中にお



第17図 S.I. 1173出土遺物

S | 1173出土遺物觀察表

地名	面積	耕法	地質	高さ	幅	段数	段高さ	耕作方法	耕作年数
1 土耕野・耕	1.00	休耕	ロクロナイト 基盤:細粒みかづり	13.5	5.4	4.4	No.2	R-2	
2 土耕野・耕	1.00	休耕	ロクロナイト 基盤:細粒みかづり	14.2	5.6	4.8	No.7	良-1	昭和3-1
3 土耕野・耕	1.00	休耕	ロクロナイト 基盤:細粒みかづり	14.6	5.6	4.4	No.5	良-4	
4 土耕野・耕	1.00	休耕	ロクロナイト 基盤:細粒みかづり	13.7	4.9	4.4	No.6	良-5	
5 土耕野・耕	1.00	休耕	ロクロナイト 基盤:細粒みかづり	13.6	5.3	5.0	No.3	R-3	昭和3-2
6 土耕野・耕	1.00	休耕	ロクロナイト 基盤:細粒みかづり	13.8	5.1	4.9	No.8	良-9	良-6
7 土耕野・耕	1.00	休耕	ロクロナイト 基盤:細粒みかづり	13.5	5.3	4.3	No.7		
8 沼耕野・耕	2.00	休耕	ロクロナイト 基盤:細粒みかづり	13.6	5.3	4.3	No.6	R-19	昭和3-4
9 土耕野・耕	0.50	休耕	ロクロナイト 基盤:細粒みかづり	13.6	5.3	4.3	No.7		
10 耕耕野・整	1.00	休耕	ロクロナイト 基盤:細粒みかづり	13.6	5.3	4.3	No.23		
地名	面積	耕法	地質	高さ	幅	段数	段高さ	耕作方法	耕作年数
11 平原	1.00	水耕栽培	[岩山] 無引第一層 水田モードー山地表土、[岩山] 有引第一層	14.0	5.0	4.0	No.13	R-66	
12 平原	0.50	水耕栽培	[岩山] 無引第一層 水田モードー山地表土、[岩山] 有引第一層	14.0	5.0	4.0	No.14	R-38	
13 大丸	0.50	水耕栽培	[岩山] 第一層 水田モードー山地表土	14.0	5.0	4.0	No.12	R-62	
14 大丸	0.50	水耕栽培	[岩山] 第二層 水田モードー山地表土	14.0	5.0	4.0	No.13	R-37	

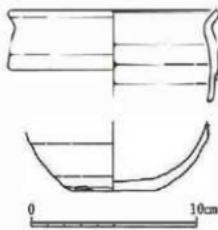
表 1 S.I.1173出土遺物集計表

品種	種子	成形・開梱	外包装												内包装	合計
			1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層	8層	カット	カット	カット	カット		
土郡巻・片	ロ絞糸		3	11	6	5	6	6	1	6	6	6	6	6	6	24
〃	体形		8	21	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	47
〃	底部		4	5	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	12
〃	角切り		6	9	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	18
〃	角切り一回巻ヘラケズリ		6	9	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	18
〃	角切り二回巻ヘラケズリ		6	9	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	18
〃	口各部 摩擦		2	17	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	19
〃	口・花 細切り		6	6	W1	W1	1	2	6	6	2	1	6	6	6	8
〃	口・花 開き		6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
〃	口・花 四四巻		6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
(小計)			17	55	1	1	13	2	3	6	3	1	13	2	1	112
土郡巻・萬葉高巻	武部		0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2
土郡巻・裏	ロ絞糸		2	1	6	6	6	6	6	6	1	6	6	6	6	5
〃	洋口ロクロ		1	0	6	6	6	6	6	6	0	6	6	6	6	0
〃	底部		1	0	6	6	6	6	6	6	0	6	6	6	6	1
〃	体形		0	1	6	6	6	4	6	1	6	6	6	6	6	7
〃	ロクロ		0	1	6	6	1	6	6	1	6	6	6	6	6	4
〃	ロクロヘラケズリ		0	1	6	6	1	6	6	1	6	6	6	6	6	4
〃	ヘラケズリ		5	9	1	6	7	0	2	6	6	6	6	6	6	25
〃	摩感		3	20	6	6	6	2	6	3	6	6	6	6	6	29
〃	底部 不明・摩感		7	0	6	6	6	1	6	6	0	6	6	6	6	9
(小計)			19	32	1	1	15	0	7	1	6	1	4	6	6	83
須賀巻・片	ロ絞糸		1	9	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	1
〃	体形		2	2	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	4
〃	底部 ヘラ切り		0	1	6	6	6	0	6	6	0	6	6	6	6	1
(小計)			3	3	6	6	6	0	6	6	6	6	6	6	6	0
須賀巻・片	体形		0	1	6	6	6	0	6	6	0	6	6	6	6	1
須賀巻・裏	ロ絞糸		9	9	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	45
〃	体形		2	3	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	12
〃	底部		0	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
須賀巻・裏	ロ絞糸		9	9	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	45
〃	体形		1	2	6	6	6	0	6	6	0	6	6	6	6	4
〃	底部		0	6	6	6	6	0	6	6	0	6	6	6	6	6
日向御巻・片	ロ絞糸		9	1	6	6	6	0	6	6	6	6	6	6	6	36
〃	底部		0	1	6	6	0	6	6	0	6	6	6	6	6	1
日向御巻・裏	ロ絞糸		0	1	6	6	1	0	6	6	0	6	6	6	6	1
〃	底部		0	2	6	6	1	0	6	6	0	6	6	6	6	8
日向御巻・裏	ロ絞糸		0	6	6	6	0	6	6	0	6	6	6	6	6	1
〃	底部		0	1	6	6	0	6	6	0	6	6	6	6	6	1
日向御巻・裏	スラダ		0	1	6	6	0	6	6	0	6	6	6	6	6	1
〃	底部		0	6	6	6	0	6	6	0	6	6	6	6	6	1
日向御巻・片	スラダ		0	1	6	6	0	6	6	0	6	6	6	6	6	1
〃	底部		0	6	6	6	0	6	6	0	6	6	6	6	6	1
日向御巻・裏	スラダ		0	6	6	6	0	6	6	0	6	6	6	6	6	1
〃	底部		0	6	6	6	0	6	6	0	6	6	6	6	6	1
日向御巻・片	カット		46	105	2	4	29	2	11	1	5	2	48	5	2	226

さまるものと考えられ、一括性のある資料と理解することができる。完形品及びそれに近いという遺存状態もそれを裏付けるものと見ることができよう(註1)。

(4) SK1174土壤

S K1174は南半部の地山面で発見した土壙である(第14図)。平面形は一部角ぼっているがおおよそ楕円形であり、壁はほぼ垂直である。規模は、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.3mである。遺物は、土器類小型甕が出土している(第18図)。口縁部から体部にかけての破片であり、直接接合しないが周辺の第1層から出土した底部破片とは器形、器厚、胎土、色調などから同一個体の可能性が高い。口縁部から体部にかけて内外面をロクロ調整している。第1層出土の底部破片は外面底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリを施しており、ロクロからの切り離しは回転朱切りである。口縁部から体部にかけての破片が土壙内か



第18図 SK 1174出土遺物

遺物名	部位	特徴	口径	底	高さ	登録番号
土師器・壺	壺土 ちへラケズリ 【内面】ロクロナデ	【外面】口縁・底部:ロクロナデ、底部:回転木切り一手持 ちへラケズリ	(12.8)	4.3		R-12

ら出土し、その底部と見られる破片が第1層より出土していることから、倒位あるいは横位の状態で土壤内にあったことが推定される。

(5) S K 1185 土壙

S K 1185は南半部の地山面で発見した土壙である(第14・16図)。平面形は南北に長い溝状であり、不整形である。底面は北半部より南半部が深くなっている。壁は概ね緩やかに立ち上がっている。規模は、長軸2.3m、短軸0.2~0.6m、深さ0.1mである。本土壙の方向は、長軸方向で計ると北で約28度西に偏している。遺物は、土師器杯・甕、鉄滓が出土している。土師器杯は底部破片が3点あり、回転糸切り無調整のものと回転ヘラケズリを施したもののが各1点ある。甕は口縁部破片が1点あり、ロクロ調整を施したものである。

(6) S K 1177 土壙

S K 1177は中央部東壁際の地山面で発見した土壙である(第10図)。平面形は長方形であり、南北に長い。壁は、南辺が緩やかであるがその他は急に立ち上がっている。底面は平坦である。規模は、長辺2.0m、短辺0.55~0.7m、深さ0.2~0.25mである。堆積土は地山と近似した浅黄色砂質土である。遺物は出土していない。

(7) S D 1181溝跡

S D 1181は北半部の地山面で発見した東西溝である(第10図)。調査区東壁付近において風倒木痕と重複しており、それより新しい。両端とも調査区外へ延びており、確認した長さは約20mである。調査区東壁付近でやや南側に湾曲しているがそれ以外は直線的に延びており、方向は直線的な部分でみると東で約14度南に偏している。幅は0.8~1.2mであり、深さは13~47cmである。底面は東側から西側に向かって傾斜しており、比高差は約3.4mである。遺物は1層から土師器甕、須恵器甕、赤焼き土器杯が出土している。

(8) S D 1182溝跡

S D 1182は中央部の地山面で発見した東西溝である(第10図)。両端とも調査区外へ延びており、確認した長さは約30mである。直線的に延びており、方向は東で約7度北に偏している。幅は0.7~1.2mであり、深さは6~59cmである。底面は東側から西側に向かって傾斜しており、比高差は約4.5mである。

遺物は1層から須恵器甕、赤焼き土器高台杯が出土している。須恵器甕は底部が回転ヘラケズリ調整されたものである。

B区

(1) S K 1176 土壙

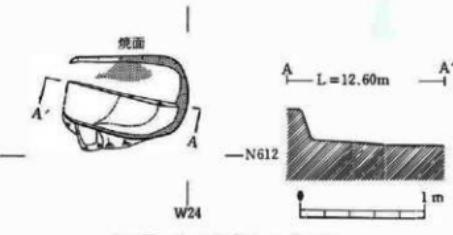
S K1176は南東部の地山面で発見した土壤である(第21図)。地山の石に接して掘り込まれており、その部分を除くと、平面形は概ね橢円形である。壁は緩やかに立ち上がっており、規模は、長径1.2m、短径0.5~0.6m、深さ0.3mである。堆積土はぶい黄褐色土の単層である。本土壤は、表上を剝離した時点で既に遺物の一部が露出しており、上面は削平を受けている可能性ある。遺物は、土師器高台杯、赤焼き土器杯・高台杯、丸瓦が出土している。土師器高台杯は床面上から、その他はそれよりやや浮いた状態で出土しているが、時期差を示すものとは見られない。赤焼き土器高台杯は細かく割れて出土したため接合しないがほぼ一個体分であり、赤焼き土器杯は口縁部が約3分の1欠損している。土師器高台杯は内外面とも器表が剥落しているが完形である。

(2) S K1175土壤

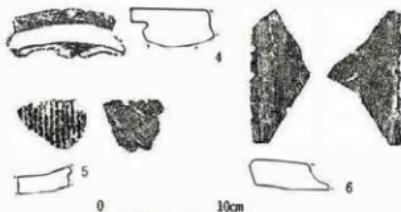
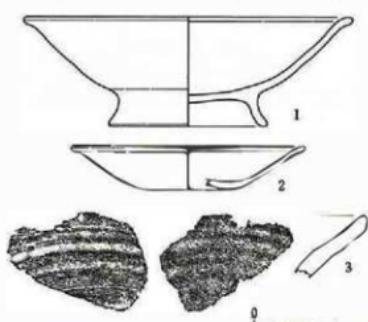
S K1175は西半部北斜面の地山面で発見した土壤である(第19図)。西側が削平を受けており、平面形はおおよそ長方形であり、隅は丸くなっている。壁は垂直に立ち上がっており、底面は平坦である。南・北・東辺の壁と底面の一部が焼けた状態で、赤色に変化している。底面付近には炭化物層や炭化物を多く含む層があり、その上に地山ブロックを多く含む層が厚く堆積している。規模は長辺約1.0m、短辺0.55m~0.65m、深さは最も深い東辺付近で0.24mである。

(3) S D1184構跡

S D1184は東端部の地山面で発見した南北溝である(第10図)。おおよそ等高線に直交するように並びて



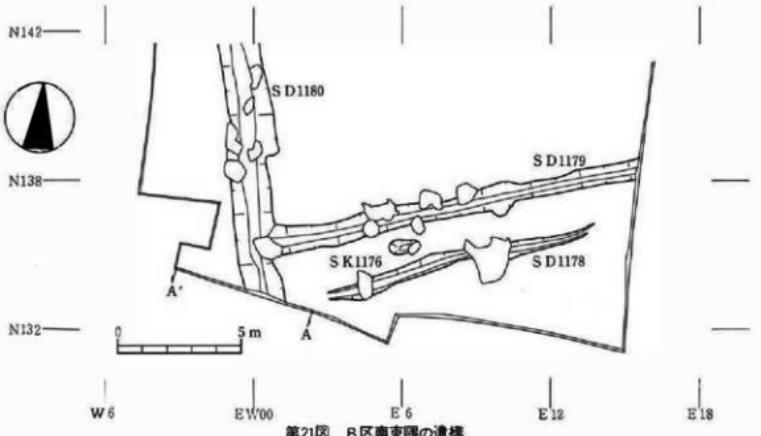
第19図 S K1175平面図・断面図



番号	遺物名	遺跡・層位	特徴	口法	底法	形	基盤形
1	赤焼き土器・高台杯	S D1184・1層	【外面】口縁・体部：ロクロナデ、底部：手切り一ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(19.9)	(9.6)	(6.6)	R-16
2	赤焼き土器・杯	S D1184-1層	【外面】口縁・体部：ロクロナデ、ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(14.2)	(4.8)	(2.7)	R-11
3	赤焼き土器・壺	S D1184-1層	【外面】ロクロナデ、内面】ロクロナデ				R-51
4	軽瓦	S D1180-1層	鉛井葉裏文				空缺形
5	平瓦	S D1180-1層	一枚作り	II B型	【凸面】舟舟一長いナゲ、【凹面】窓切引き窓（つぶれぎま）		R-65
6	平瓦	S D1180-1層	一枚作り	I A-B型	【凹面】舟舟目一ナゲ一凸版台形窓、【凸面】第2次舟舟一凸版台形窓		R-66

第20図 S D1184・1180出土遺物

いる。平面的な形態は、北半部は直線的であるが南半部は西側に緩やかに湾曲している。壁は緩やかに立ち上がっているが、底面は南側から北側に向かって大きく傾斜しており、北端部と南端部とでは約1.9mの比高差がある。規模は、南北11.7m、幅0.8~1.3m、深さ0.1~0.3mである。堆積土は主に黄褐色砂質土を主体としている。遺物は、1層から土師器杯・須恵器杯・蓋・甕・赤焼き土器杯・高台杯・甕が出土している(第20図)。土師器杯はいずれも体部の破片である。須恵器杯はロクロからの切り離しがハラ切りのものが1点出土している。



第21図 B区南東隅の遺構

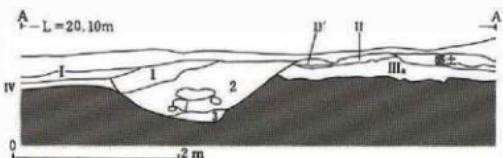
(4) SD 1180溝跡

SD 1180は東半部で発見した南北溝である(第10・21・22図)。大部分は地山面において確認しているが、旧表土が残存している調査区南端部においては第II層上面から振り込んでいることを確認している。南北両端とも調査区外へ延びており、確認できたのは水平距離で約43mである。方向は北で約10度西に偏している。幅は0.4~0.7mで

あり、深さは約1.0cmである。底面は南側から北側に向かって大きく傾斜しており、比高差は約8.3mである。遺物は須恵器瓶、転用硯(図版3-6)、軒丸瓦(第20図4)、平瓦などが出土している。転用硯は須恵器甕の体部破片を利用したものである。

(5) SD 1179溝跡

SD 1179は南東部の地山面で発見した東西溝である(第21図)。西側がSD 1180の東壁にほぼ直角に連結している。一方、東側は調査区外へ延びており、確認できたのは15mである。方向は東で約11度北に偏し



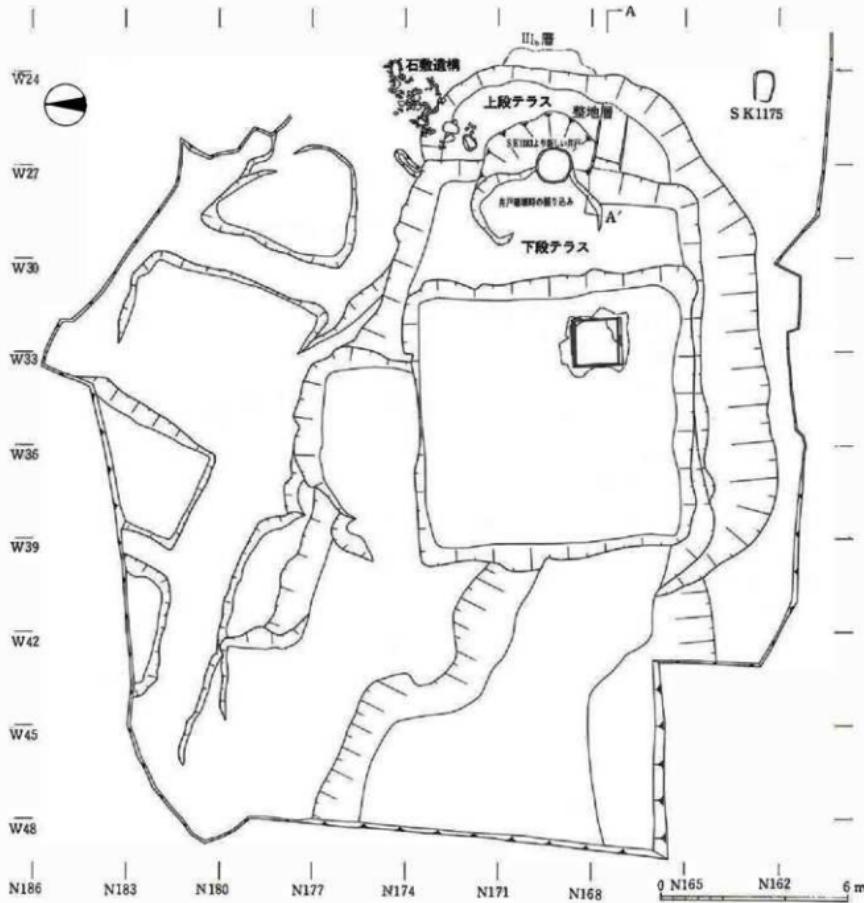
第22図 SD 1180断面図

層位	色	土質	特徴
I	薄色 (DVR 4 / 4)	砂質土	しまなし
II	黄褐色 (DVR 5 / 8)	砂質土	
III	薄色 (DVR 4 / 8)	砂質土	
IV	暗褐色 (DVR 3 / 4)	砂質土	流入物はほとんどなし。均質
1	薄色 (DVR 4 / 4)	砂質土	地山ブロック多く含む
2	薄色 (DVR 4 / 4)	砂質土	流入物はほとんどなし
3	濃い黄褐色 (DVR 4 / 3)	砂質土	地山ブロック(大小)を多く含む
			地山颗粒を含む。堅くしまる

ている。幅は0.7~1.2mであり、深さ約25cmである。底面は西側から東側に向かって傾斜しており、比高差は約1.5mである。遺物は土師器壺、須恵器壺、赤焼き土器高台杯が出土している。

(6) S D1178溝跡

S D1178は南東部の地山面で発見した東西溝である(第21図)。途中地山の石で分断されている部分もあるが11.2mにわたって検出した。方向は東で約14度北に偏している。幅は0.4~0.7mであり、深さは最も深いところでも約10cmである。底面は西側から東側に向かって傾斜しており、比高差は約2.5mである。遺物は出土していない。

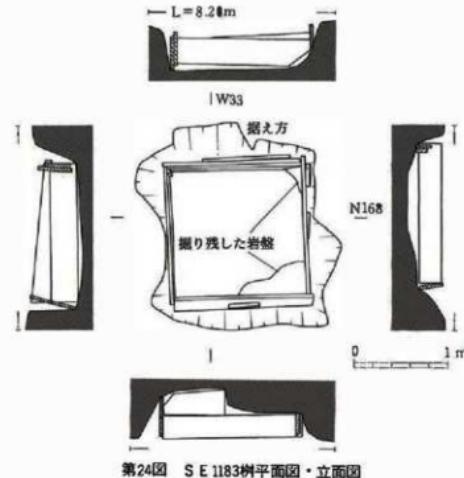


第23図 S E 1183平面図

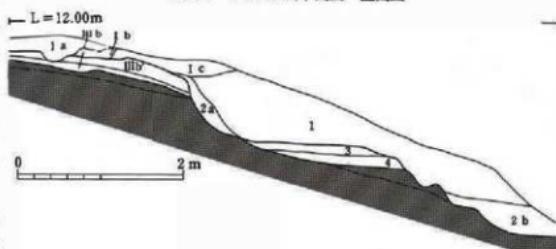
(7) S E 1183井戸跡

S E 1183は西半部の平坦面で発見した近代の井戸跡である(第23図)。位置的には南側の谷の最も奥まった地点にあたり、北斜面に接して掘削されている。構造的には地山を掘り凹めただけの素掘りの井戸であり、一段深い枠状の施設を備えている。東側には上下2段のテラスがあり、上段テラスの北辺に通路状の石敷き遺構がある。なお、これら全体を囲むように南側の斜面裾部が東西約14mにわたって大きく抉られている。井戸本体は灰白色火山灰がブロック状に入れる南側の谷の堆積土を掘り込んでおり、上段テラスも灰白色火山灰降下後の黒褐色土(III b層)から掘り込んでいる。上段テラスと下段テラスの境は現代の井戸によって破壊されている。

井戸本体については平面形が正方形であり、規模は一辺8.8~9.2m、深さ約1.5mである。地山に大きな礫が含まれているため、その掘り残しや抜けた穴によって壁や底面は凹凸が著しいが、基本的に壁は垂直であり、底面は平坦であ



第24図 S E 1183井戸跡平面図・立面図



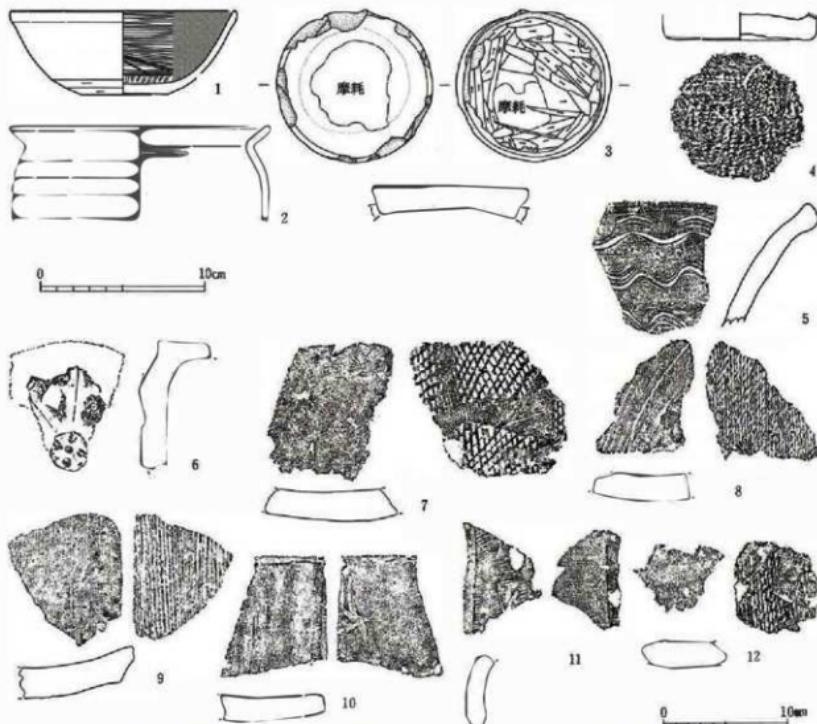
第25図 S E 1183テラス断面図

る。樹は横板を組んだ側を持つもので、中央よりやや南東隅寄りに設けられている(第24図)。樹の構築に際しては、側面より一回り大きな据え方を掘り、その上部に横板を組んだもので、掘り方の底面がそのまま樹の底面となっている。側板は、北・西辺と南辺の西半分は横板を2段にしているが、掘り方内に一抱え以上の大きな礫が露出している南辺東半分や東辺は1段となっている。それらの固定方法は、横板の一方の小口面がそれぞれ隣り合う横板の端部に直角にあたるように合わせ、掘り方の裏込めによって固定している。平面形は正方形であり、規模は一辺1.5m、深さ0.4~0.6mである。掘り方は、平面形が不整形であり、壁の立ち上がりも一様ではない。規模は南北1.9~2.2m、東西1.6~1.9mである。堆積土についてみると、樹内部はグライ化した柔弱な暗灰色土であるが、本体には地山ブロック層および黒褐色土の厚い層が粗く交互に堆積しており、人為的に埋め戻された可能性がある。遺物は、本体の堆積土から現代の磁

層	色	土質	特徴
I-a	灰褐色土(IV YR 5/4)	砂質土	地山細粒土や砂を多く含む
I-b	黄褐色土(VYR 5/5)	砂質土	砂を多く含む
I-c	灰褐色土(VYR 5/5)	砂質土	砂(10%以上)を多く含む
II-a	黒褐色土(IV YR 3/3)	砂質土	地山小ブロック・細粒土を含む
II-b	黒褐色土(IV YR 3/3)	砂質土	入道雲(一塊の石)を多量に含む
III-a	黒褐色土(IV YR 4/6)	砂質土	砂質土・入道雲(一塊の石)を多量に含む
III-b	黒褐色土(2.5 Y 3/1)	粘土	細粒土・地山細粒土が多く含む
IV-a	灰褐色土(IV YR 4/2)	砂質土	地山細粒土が多量に入る。グライ化
IV-b	灰褐色土(IV YR 4/2)	砂質土	地山細粒土が多く含む
V-a	灰褐色土(IV YR 4/2)	砂質土	地山小ブロック・細粒土を含む

器染付碗、樹の底面付近から揚水ポンプのパッキンが出土している。

テラスについては、上段は地山を削り出した後に灰黒褐色土で整地しているが、下段は地山を削り出しただけである(第25図)。規模は、上段が東西3m、南北9m、深さ約1mであり、下段が東西3~4m、南北9~10m、深さ約1.1mである。石敷遺構は、上段テラスからその外側にかけて延びているもので長さ約4mにわたって検出した。幅約1mの範囲におおよそ長さ50cm、幅25~35cmの大きめの石を中央に据え、その周辺に小砂利から拳大の石を詰めて構築している。据え方は検出できず、上段テラスにおいては整地



番号	遺物名	場所・部位	性	分類	特	口	底	通幅	底幅	底面号	回復号
1	土器底・片	A区ノ1層	外縁	口縁・休面:ロクロナド。休面下端部一帯墨:凹輪ヘタケズリ	(13.3)	5.2	3.1	8~15			
			内縁	ヘラミガキ・黑色鉛鉢							
2	土器底・底	B区東ノ1層	外縁	ロクロナド、ツール状切削痕あり。(内縁)ヨコナド、底の高い付合跡あり	(13.7)			8~16			
3	瓦片	B区東ノ1層	外縁	ロクロナド、ツール状切削痕あり。内縁:凹輪ヘタケズリ・凹輪ヘタケズリによるシザリ・中央部に突出部	(13.7)			8~24	10mm	1~5	
5	瓦片・底	A区ノ1層	外縁	ロクロナド→斜状欠缺(内縁)ハケズ	(13.2)			8~24			
6	野球	B区東ノ1層	休面	凹輪ヘタケズリ	(13.2)	8.0	6.0	14~24	10mm	1~34	
7	野球	B区東ノ1層	休面	植物き作り	(13.0)	7.0	5.0	11~20		1~39	
8	野球	B区東ノ1層	休面	二凹輪	(13.0)	7.0	5.0	11~21		1~41	
9	野球	B区東ノ1層	休面	二凹輪	(13.0)	7.0	5.0	11~21		1~42	
10	野球	A区ノ1層	休面	植物き作り	(13.0)	7.0	5.0	11~20	ナーハイ台形底、(内縁)底子穴有り・凹輪ヘタケズリ	1~61	
11	野球	B区東ノ1層	底土被り	凹輪ヘタケズリ	(13.0)	7.0	5.0	11~20	ナーハイ台形底、(内縁)平行引き目	1~61	
12	野球	B区東ノ1層	底土被り	凹輪ヘタケズリ	(13.0)	7.0	5.0	11~20	ナーハイ台形底、(内縁)平行引き目	1~64	

第25図 遺構外出土の遺物

の際に一緒に埋め込んでいる。

6. 遺構外出土の遺物

(1) 谷の堆積土出土の遺物

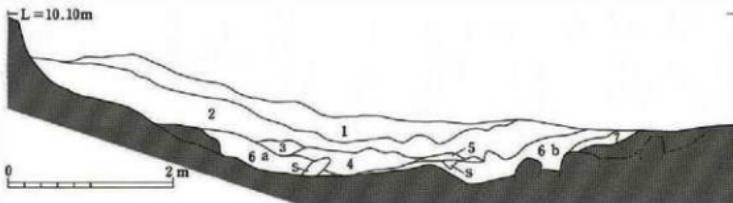
谷は調査した範囲も狭く、遺物も数点出土したのみである。北の谷においては灰白色火山灰がブロック状に入る亜泥炭層から灰釉陶器瓶の体部破片が1点出土している。外面に黄緑色の灰釉がかかっている。また、A区南端部の黄褐色土層から土師器杯・甕・須恵器甕、灰釉陶器小瓶などが数点出土している。灰釉陶器小瓶は体部の小破片である。割れ口は滑らかであり、外面上部にはオリーブ色の灰釉が点々と付着している。特徴的な部分が出土していないため年代等は不明である。南の谷においては灰白色火山灰降下後の黒褐色土層から瓦質土器火鉢の口縁部破片が1点出土している。口縁部の形態から近世以降の製品と考えられる。

(2) 第III層出土の遺物

土師器杯・甕・須恵器甕・瓶、赤焼き土器杯・高台杯・円面硯、平瓦などが少量出土している。円面硯は硯部のみの破片資料である(第26図3)。硯面は、中央部が若干盛り上がっており、その部分を中心的に顕著な使用痕が観察できる。一方、その裏面は逆に凹んでおり、幅0.5cm前後の工具によって不定方向に強く削り取った痕跡が認められる。この面においても中央部よりやや外側に寄った位置に摩耗部分がある。また、側面については、硯面の下全体に敲打による加工痕および一部に研磨痕がある。本資料が円面硯であることは硯面の形態から疑いないところであるが、全体がどのような形態になるものか判断する材料がなく不明である。また、裏面に認められた摩耗部分から、二次的にその面も硯として使用した可能性がある。その際、側面に認められた加工痕との関わりが問題になろうが、それについては明らかでない。平瓦は多賀城政庁創建期のものである。

(3) 第I層出土の遺物

土師器杯・甕・甌・須恵器杯・高台杯・甕・瓶、赤焼き土器杯・高台杯・綠釉陶器・軒丸瓦・丸瓦、平瓦、撚文土器深鉢、石鐵、砥石が出土している。土師器杯はロクロ調整を行なわないものもわずかにみら



位	色	土質	特
1	黒褐色 (10YR 3/1)	砂質土	しまりなし
2	黒褐色 (10YR 3/1)	砂質土	地山断面を多量に含む。しまりなし。グライ化
3	黒褐色 (10YR 3/2)	粘土土	しまりなく柔らかい
4	黒褐色 (10YR 2/3)	泥炭灰層	灰白色火山灰のブロックを含む
5	灰白色		灰白色火山灰の2次堆積層
6 a	灰褐色 (10YR 4/2)	砂質土	地山断面を多量に含む。ややしまりなし
6 b	黒褐色 (10YR 3/2)	砂質土	地山断面を多量に含む。しまりなくやや粘性あり
7	にじむ灰褐色 (10YR 5/3)	砂質土	地山断面を多量に含む

第27図 南の谷断面図

れるが、大部分はロクロ調整を施したものであり、底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリしたものが見られる。須恵器杯は底部がヘラ切りのものや、全面を回転ヘラケズリしたものなどが出土している。縁鉢陶器は碗あるいは皿の口縁部較片資料である。濃緑色の釉が施されており、内外両面ともヘラミガキは観察できない。平瓦は大部分が多賀城政府創建期のものであり、わずかに第IV期のものも出土している。

7. 考察

(1) 古代の遺構の年代と変遷

今回発見した遺構は、第II層との関係が確認できたSD1180・1179をのぞくといずれも地山面で発見したものであり、相互の層位的関係および新旧関係を把握できなかったものである。従って、それらの年代については出土遺物の年代が唯一の手掛かりとなる。多賀城跡出土土器については白鳥良一氏の研究によってA～F群に分類されており(註2)、その後、年代観については一部修正が加えられている(註3)。以下、それらの成果に基づき発見遺構の年代について考察する。なお、本書中で「赤焼き土器」と呼んでいる土器は、多賀城跡出土土器の「須恵系土器」と同一の土器である。年代観についても同様である。

S I 1173は今回の調査で発見した遺構の中では最も多くの遺物が出土した遺構である。カマドとその周辺から完形品およびそれに近い状態の土師器杯9点をはじめ土師器壺体部較片などが出土しており、それらを一括資料として扱うことが可能であることは既に見たところである。それらの土器の特徴として次の点があげられる。

- ① 土師器杯・甕は、いずれもロクロ調整を行ったものである
- ② 須恵器は2層から底部ヘラ切りの杯や蓋・甕・瓶などの較片資料が数点出土しているのみであり、赤焼き土器は全く出土していない
- ③ 土師器杯の底部は回転糸切り無調整である
- ④ 土師器杯の器高/口径比は0.31～0.35であり、底径/口径比は0.36～0.44である。

①③の特徴はB群からF群にかけて見られるものであるが、②の赤焼き土器が全く出土していない点を重視すればE・F群に属する可能性は消えるであろう。底部の再調整については、C群段階では回転ヘラケズリを行なうものが比較的多く、D群段階でも再調整されるものが約1/2であったのが、F群段階になると無調整のものが主体を占めるという傾向が指摘されている。同様に、口径に対する底径の比率についても、大きなものから小さなものへと変化していることが明らかにされている。D群土器に位置付けられている多賀城跡第61次調査(鴻の池地区)第10層出土土器は土師器が主体を占め、初源的な須恵系土器とわずかの須恵器、灰釉陶器で構成されるものである(註4)。この土師器杯は器高/口径比が0.27～0.38、底径/口径比が0.36～0.46であり、本土器群と極めて近似している。多賀城跡第61次調査第10層出土土器は底部に再調整を行なうものが1/2存在することから、本土器群はそれより新しい要素を持つとみることができよう。以上の点から本土器群はD群土器の中でも新しい段階、E・F群土器に伴う一般的な須恵系土器出現直前頃に位置付けることが妥当である。D群土器は9世紀後半頃、E群土器は10世紀前半から後半にかけての頃のものとされていることから、S I 1173出土土器は9世紀末頃の年代と考えられる。これらの土器は住居廃絶時に最も近い遺物であることから、S I 1173の年代についても同様の年代が与えられよう。

S B 1172、S K 1174・1176・1185、S D 1184については遺物の出土量が少なく、しかも較片資料しか出土していないものもあるためA～F群土器のいずれに相当するものかは明確にできない。S B 1172とS K

1174からはロクロ調整を施した土師器壺が出土していることからC群以降であり、9世紀前半以降とすることができる。赤焼き土器を含まずロクロ調整を施した土師器杯・壺が出土しているSK1185はC・D群に相当するであろうから9世紀頃、赤焼き土器が出土しているSD1176・1184はE・F群のいづれかに相当することからおおよそ10世紀前半頃と考えておきたい。

SD1178～1182は黒褐色土を堆積土とすることで共通する溝である。出土遺物もすべて古代の土器と瓦であり、中世以降の遺物は含んでいない。このうちSD1180は第II層上面から掘り込んでいることを確認しており、それと連結するSD1179も層位的には同様であったことが知られる。第II層は赤焼き土器を含む第III層を覆うことからE群以降の堆積層であることは明らかであるが具体的な年代は不明である。赤焼き土器が出土しているSK1176、SD1184の堆積土はいずれも黒褐色土を全く含んでいないことから、E・F群の段階としたSK1176、SD1184より新しい時代の遺構である可能性が高い。両者の間に大きな時間差を想定すべきかもしれないが、おおよそ10世紀前半以降のものと見ておきたい。

SB1171については特徴的な遺物が出土していないため年代は不明である。しかし、SB1172やSI1173とは方向がほぼ同じであり、SB1172とは柱穴埋土が類似していることからおおよそそれらと同じ頃の年代と推定され、9世紀頃と見ておきたい。SK1177・1175については遺物が出土していないことから年代は不明である。

各遺構の年代を整理すると次のとおりである。

SB1171	9世紀頃
SB1172	9世紀前半以降
SI1173	9世紀末
SK1174	9世紀前半以降
SK1185	9世紀以降
SK1176・SD1184	10世紀前半頃
SD1178～1182	10世紀前半以降

これらはおおよそ次の三つの段階にまとめることができる。

I期：9世紀頃の遺構（SB1171・1172、SI1173、SK1174・1185）

II期：10世紀前半頃の遺構（SK1176、SD1184）

III期：10世紀前半以降の遺構（SD1178～1182）

各地区ごとの遺構の分布をみると、I期の遺構はA区、II期の遺構はB区と時期的に偏って存在している。発見した遺構の数が少ないと明瞭ではないが、I・II期については時期ごとに場の使われ方が変化した可能性がある。

遺構の性格については不明であるが、調査区全体を通じて掘立柱建物が竪穴住居が存在したのはI期のみであり、地形的にも居住空間として適した場ではなかったことが推定される。むしろ掘立柱建物跡と竪穴住居跡がA区南東部に片寄って発見されていることから、既に宅地化された調査区外東側に遺構が広がっている可能性が考えられる。また、B区からも土器、陶器、硯、瓦などが出土していることから、調査区外南側にも遺構の存在を想定できよう。

(2) 近代の遺構について

SE1183は一辺約9m、深さ約1.5mの大井戸であり、貯水量も膨大であったと推定される。かかる井戸

は1軒の家はおろか一般的な集落の井戸としても必要以上の規模であるといえる。太平洋戦争の頃、本市（当時 多賀城村）東部から七ヶ浜町にかけて海軍工廠が建設され、本調査区の南約200mの留ヶ谷字影屋敷一帯に工具養成所および男子学生寮が配置されている。これらの施設建設に必要な水は付近の井戸や湧水を利用することにしたとされている（註5）。位置、規模、年代などの点からS E1183は海軍工廠建設時に使用された可能性がある。

8. まとめ

1. 平安時代の掘立柱建物2棟、竪穴住居1棟、溝1条、土壙3基、平安時代中頃以降の溝5条、近代の井戸1基、年代不明の土壙2基を発見した。
2. 古代の遺構の性格は不明である。

註1 №4・10・11・12・15については図示していない。№15は土師器壺の体部破片資料である。頸部はヨコナギあるいはロクロナギ、体部は縱方向にヘラケズリしている。№10は土師器壺の口縁部破片資料であり、11・12は底部破片資料である。3点とも表面が磨滅しているため土師器か赤燒き土器かの判断が難しいが、いずれも外面と比較して内面の色層が黒いことから黑色燒理を想定し、土師器であると判断した。№12は底部が回転糸切り後無調整である。№4は磁石である。

註2 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所「研究紀要VIII」1980

註3 白鳥良一「喜川窯 考察(2)土器」宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡 政府跡本文編」1982

註4 柳沢和明「III 第61次調査」宮城県多賀城跡調査研究所「宮城県多賀城跡調査研究所年報1991」1992

註5 鹿波信雄「第三章 戰争と多賀城 第二節 多賀城海軍工廠について」多賀城市「多賀城市2 近世・近現代」1993

(6) 北方零点基準区



(6) 南面基準区



中央北面基準区、鐵道の北側の区域





S I 1173 遺物出土状況（西より）



S I 1173 カマド周辺遺物出土状況（南より）



S I 1173



S I 1173 カマド



S K 1175



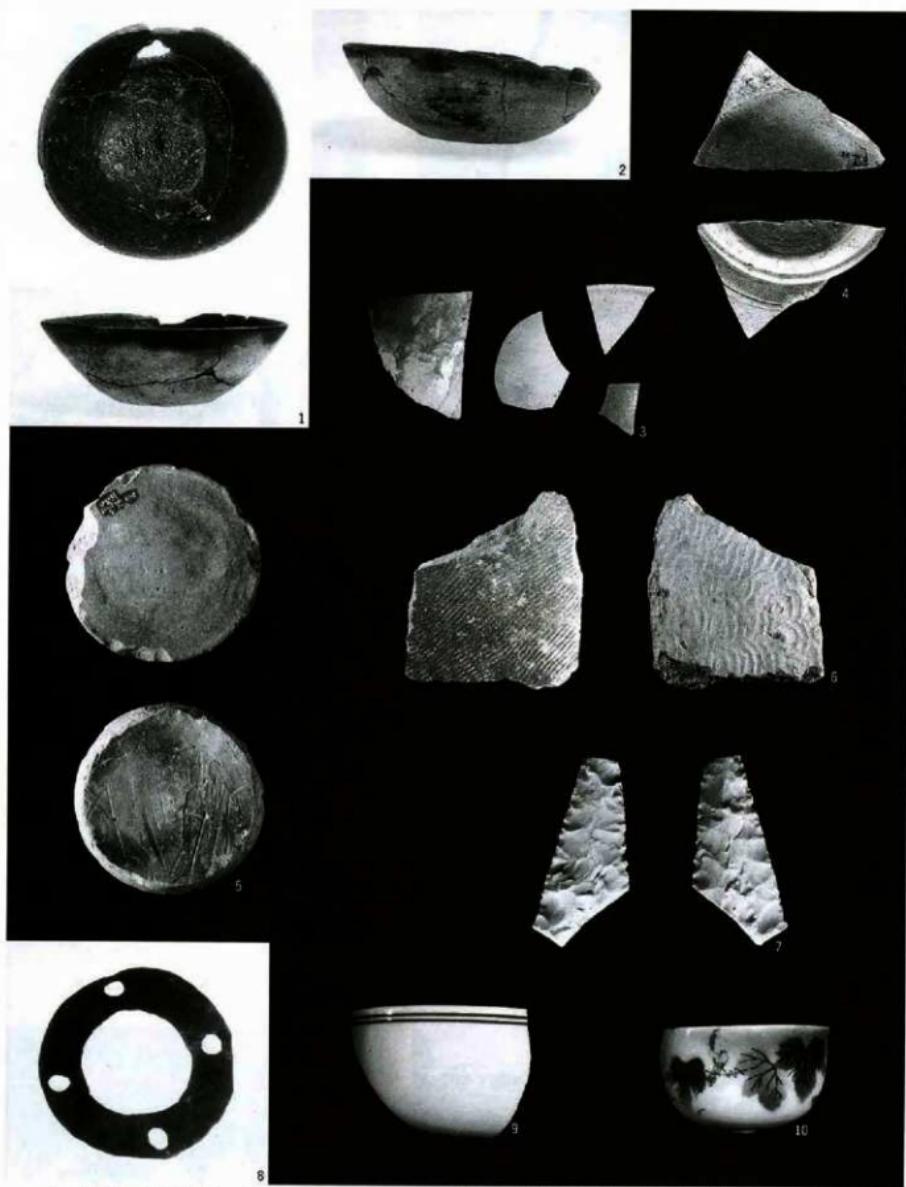
S K 1176 遺物出土状況



S E 1183



第IIIb層とそれに覆われる灰白色火山灰
(B区S E1183上段テラス東壁)



1 土器器杯 S I 1173 (R-1)
 2 土器器杯 S I 1173 (R-3)
 3 (左) 灰釉陶器版 北の谷 (R-21)
 (中) 灰釉陶器小瓶 北の沢 (R-20)
 (右上) 灰釉陶器碗 S I 1173 (R-18)
 (右下) 绿釉陶器碗 № 2 トレンチ (R-17)

4 灰釉陶器碗 S I 1173 (R-19)
 5 円面鏡 № 3 トレンチ (R-14)
 6 転用鏡 SDI:180 (R-28)
 7 石鏡 B区L-1 (R-33)
 8 パッキン S E1183 (R-43)
 9 磁器茶碗 S E1183 (R-29)
 10 磁器茶碗 S E1183 (R-30)

高崎遺跡出土燈明皿内の残存物について

国立歴史民俗博物館 永 嶋 正 春

はじめに

標記の遺跡から出土した燈明皿様土器1点について、その付着残存物を調査した。従前の調査を踏まえれば、本土器も燈明皿として使用されたものに間違はないと思われるが、念のため確認したものである。ただしこの付着物の中にも、燈心に使用したと思われる植物質素材が存在するかどうかは、きちんと確認をする必要があり、その意味では本調査もまた重要である。

調査結果

付着物は、主に内底面部に残存しており、かなり艶のある黒色膜状を呈しているが、その表面は全体としては月の表面を見るがごときアバタ状を示しており、網状のクラックも観察された(図1)。また口縁部の内面にも、ごく一部にではあるが、同様の付着物が認められた(図2)。両箇所より微少な試料を採取し、ポリエチレン樹脂に埋包固定後切断し、最終的には薄片状態にして光学顕微鏡による観察を行ったところ、両者の試料について、油状の層とともに植物質の素材が確認できた(図3、4)。この植物質素材の顕微鏡的な性状は、従前の調査で検出されたものに全く一致しており、草本性の燈心材とみて間違はなかろう。

(参考) 永嶋正春「高崎遺跡出土燈明皿内の残存物について」『高崎遺跡第一回調査報告書』多賀城市教育委員会 1995

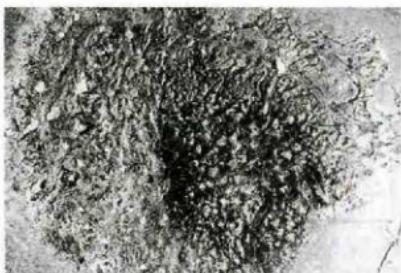


図1 内底面付着物 1.2×



図2 口縁部内面付着物 1.2×



図3 付着物層断面(内底面) 600×



図4 付着物層断面(口縁部) 600×

報告書抄録

ふりがな	たかさきいせき							
題名	高崎遺跡							
調査名	第13~16次調査							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第42集							
編著者名	千鶴孝弥・石川俊英・武田健市							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒985 宮城県多賀城市中央二丁目27-1							
発行年月日	西暦1996年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
高崎 (第13次)	多賀城市高 崎二丁目 117-6	18	018	38度 17分 25秒	141度 00分 17秒	19940704 ~ 19940729	185	住宅建設
高崎 (第14次)	多賀城市高 崎二丁目 14-1	18	018	38度 17分 06秒	141度 00分 13秒	19940824 ~ 19940831	257	住宅建設
高崎 (第15次)	多賀城市高 崎二丁目 246-14, 246-19	18	018	38度 17分 34秒	140度 59分 51秒	19940907 ~ 19940928	200	住宅建設
高崎 (第16次)	多賀城市高 崎一丁目 16-1外-6 原	18	018	38度 17分 23秒	141度 00分 11秒	19950619 ~ 19950828	2,137	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
高崎 (第13次)	墳墓		土壙	須恵器、瓦				
高崎 (第14次)	墳墓	平安	溝	須恵器 土師器 瓦				
高崎 (第15次)	墳墓	平安	堅穴住居 土壙	須恵器、土師 器				
高崎 (第16次)	村落	平安	海立柱建物 堅穴住居、土 壙、溝 井戸	土師器	堅穴住居から灯明陶 出土			

多賀城市文化財調査報告書第42集

高崎遺跡

—第13~16次調査報告書—

平成8年3月31日 発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022) 368-1141

印刷 今野印刷株式会社

仙台市若林区六丁の目西町4-5

電話 (022) 288-6123